

\*耶穌曰、今日我  
神は今日  
至るまで  
に給ふなり  
が働きの  
も働くなり

人格的の神なり、禪のは非人格的の神なり。前者は慈愛の神、後者のは寂然不動のスターンなる、いかつげなる神、前者は情をもて感應する神、後者のは智見をもて觀照する神、前者は活動の神、後者のは靜止のビーイング。後者の神は頗るスピノーザの神と似通へる所あり、スピノーザが永恆一如の實相を打ち眺めて、心恍然として神もて溢るゝさまは、禪林の徒が悟に入りて大歡喜の波に漂ふと白隱などはいふさまと相似たり。たゞ其のこゝに到る方法は二者勿論異なる。

(全日)

○  
禪の悟に到る方法はまた頗る新プラトーン派のに似たり。思ふに、人まことに悟らんとせば、まことに實在に觸れ

んとせば、必ずやその準備として、多かれ少かれ禪的方法を執り用ひざるを得ざるべし。スピノーザが、あらゆる妄想を去りて、一念ひとへに天地の永恆相を大觀せよといへる、耶穌が、心を清くして人はじめて神を見るを得べしといへる、儒教が、人欲の私を去りて心廓然たる大公の態となれば物の順應自然なるをいへる、中齋が太虚を極言せる、蓋し皆必然の數なるべし。唯禪の如きは極めて之れを高調に説くのみ、インテンセスト、フォームにて言ひ現せるのみ。

(全日)

○  
融會無碍の大自然は、禪が悟によりて得る結果なり。之れを客觀なる……

編者曰以上五節の日附順を失したれど姑らく原本の儘に存せり。

\*十五日所感  
とついで

○  
\* 毫も美意識なくして或はこれ有るも實意識これに勝てる言ひ現せる基督の語尙ほ美しき詩となれるは何故ぞといふに畢竟天地の實在に觸れたる宗教的真理其者が本來詩的のものなるが故也、極めてサグゼスチーヴのものなるが故也。如何に發達せる宗教にても即ち幼稚粗雑なる偶像的、感覺的宗教のシンボル多きものを去ると遠き精神上無形の一神を崇拜する基督教のごとくにありても其の真理は依然として抽象冷索のものにあらずして温かき生命を帯びたる真理なり。されば之れを言ひ表さんとすれば、どうしても具象的の詩語、少くとも詩語に近き語を假らざ

るを得ず、否宗教上の真理は之れに沈潜すると深ければ深きほど、詩趣の語もて之れを言ひ表さざるを得ず。されば當人は如實の真理として表白せるものも、其の意識に參らざるものよりして之れを見れば、唯一個のシムボリカルの語としか思はれず、耶穌の意識に參せざるものより見れば、其の神は愛なり、我が父などの語は、一種のシムボルとしか思はれざるべし。果して其はシムボルなりしや、耶穌はシムボルとして、これらの語を用ひたりしや、或はまた如實に心まことに神は愛也、父なりと信じて、まか言ひ表せりしにや、恐らく彼れは實にまか信じたりしなるべしと思はる。唯だ一種實在に對する或深奥の意識ありて、而してかりに之れを言表すために、如是言辭を用ひたりとは少しく牽合

の見なるべし。されどこは主觀的信仰にして、或は耶穌以上の天才出て來らば、耶穌の件の言葉は客觀的に見ればシムボリカルの語たるに過ぎずといはんか、客觀的に見れば、天地の實在は父なり愛なりといふと以上の或ものにて、これらの言葉は、いまだ適當に、嚴密に、實在者をあらはしたるの語にあらずといはんか、而して彼れ(かゝる天才)が其の新意識を表するに、他の異なりたる言葉を用ひたりとせんか、其の如何なる言葉を用ひて如何なる表白をなすとも、其はまた一種の詩語、少くとも詩的表白の語たらざるを得ざるべし(前に述べたる理由によりて)。然らば後人また出て、之れを評してシムボルの語となし、更に他に適當の表白を與へんとするものあるなきを保せず。かくして宗教的眞

理を表する言葉は、如何なる天才出て、之れを如實に、さながらに寫しとり、言ひ表さんとするも、依然として一のシムボルを他のシムボルに移し易ふるまでなるべし。

(三月十五日)

○  
現實(實際)、詩、實相。宇宙人生は大別すればこの三階段となるべし。詩は現實と實相との中間に位するものなり。現實即ち普通日常の現事相は最も無味なるもの、インシビッドのものなるべし。詩は少くとも此以上の富贍なる意味を有す。更に一段上りては實相其者これなり、詩が意味饒しといはるゝ所以は、一つは其の實相をかすかに寫し出だしたるもの、少くとも寫しいだしたりと見らるゝが故な

らずばあらず。勿論、詩よりも現實の意味一層多き場合もあり、これ屢々自然に歸れ、現實に歸れといふ呼び聲の詩壇に聞かるゝ所以なり。されど如きは少くとも偉なる詩にあらず、天才の詩たとへばダンテ、ミルトン、シェイクスピアの詩に至りては、何人か之れを現實世相より意味貧寒なるものと思はんや、吾人は現實以上の深き世相を此中に認めて心動き情躍るならずや。一言もて掩へば、此等天才の詩は、現實の深底に沈みて、その深奥なるひゞきを聴取して之れを寫し出でたるが故也、即ち實相の影なるが故也、少くとも實相の一部に觸れたる聲なりと思はるゝが故也。されど仰げば實相の山は尙ほ高いかな、俯せば實相の海はなほ深いかな。

○

\*  
根柢に宗教  
的動機あり

さればわれ思ふ、吾人が詩を讀むは、唯だ美意識の恍然たる夢心地の快を得んが爲めのみならんや、一つは(時として全く)現實の世相よりも一段深い或物を見んが爲めなり。人は、さしも快樂狂にはあらず、現實のインシビッドなる淺薄に壓きて、一段深き世相を見んが爲めに、こゝに奔るなり。劇を見にゆく人の動機、また一つは(少くとも)一部の人はこれなり、我等は時として、淨溜璃などを聽きて親子夫婦の人情の、そこにては普通現實よりは深きを見るなり、普通の人情よりは深い人情を味はんが爲めに、吾人は(少くとも)その一動機は義太夫などを聽きに行くなり。吾人は、大閤記や、十種香や、千代萩を聽きて、管に美感上の快感に漂はされて

快とするのみならず、同時に現實より一層深き世相(即ち實相の斷片)に觸れたる實意識の快をも覺ゆるなり(尙ほこの點ハルトマンなどの論もあれば研究問題也)。

(三月十六日)

○

天地の實在に對する吾人が深き叫びの聲、向慕渴仰の聲、この聲のみは理性が打ち消す能はざる情の特權なり。理性もし神をなしとせんも、尙ほ吾人は吾人の全心をうちささげて、涙を以て慕ひあくがる、一實在を造りいださずば已まざらんとするなり、この至切の情のみは理性の干與をうけざる獨立の面目を有す。プラトーンは、この情をエロース(戀)といへり、天地に對する戀語は、悉かく詩的なれども、

これ實に人の至深の情を言ひ表さんとせる一企圖にて、少しく意識の深きものは、この語に尠からざる同情を寄するなるべし。スピノーザは神に酔へりと言はるゝほどに神に心あこがれたり。最もこの意識の強かりしは耶穌なり、耶穌は神を父と呼びて、常にこの一源泉より生命の水を汲みいでたり、實在に對する至切の情を最も至切に沈痛に意識したるものは耶穌也。宗教的意識は、耶穌空前にして恐らくまた空後なるべし、神を父と呼ぶほど強き深き切なる寫象、ファッスングはまたとあらざるべし。こは天才の偉大なるオリヂナリチーにして、哲學はこの前には顔色なし、唯だ驚くべき天才の打ち立てたる事實として打ち仰ぐの外なし。こゝには理由を叩くの道なきなり、理性をもて是

非するには餘りに強大明白に過ぎたる不可否の事實なり。

(三月廿六日)

○ 天地の實在を渴仰する一種の情は、あらゆる宗教的意識の根本的要素なり。この一情の發表のさまざまなるにつれて、百態の宗教的意識を生ず。プラトーンの宗教も、耶穌の宗教も、禪も、孔子も、皆この一要求に立つ、但その要求が情的發表をもて勝ち、知的發表をもて勝ち、意的發表をもて勝つに従つて種々の形態を異にする也。

○ 時間空間をはかる客觀的規定は、以て主觀的意識の眞理を如何ともすると能はず。客觀的計算よりいへば、一分時

\* 一日三秋、  
一日百年の  
語味ふべし。

間は短き時間なりとも、若し一人ありて之れを非常に長く感ぜしならば、其人に取りては一分時は實際長かりしにて、この意識上の事實は時間の客觀的規定によりて減かす能はず。この感情に虚妄といふとなし、迷信といふとなし、親が子を可愛いと感ずる情は理性は毫も之れに與らず。ここに虚なし、迷なし。

(四月三日)

○ 知識のみが感情發達の因たるにあらず、感情自身に自家發達の法則あり。勿論感情には知識の影響なしといふにあらず、知識が明亮に富贍とならば、感情も幾分ビューリフイケーションを受くるとあるべし。されど感情は又感情あつづからの境あり、領分あり、情は情をもて煽がざるべか

らず養はざるべからず。知識高き人にして情の卑き人あり、知識卑くして情高き人あり。

(全日)

○ 詩人は天地の美を歌ひ歌うて、つひに歌ひつくす能はざる境に至つて美以上の或ものを想ふ、哲學者は天地の理を説き説きて、つひに説きつくす能はざる境に至つて理以上の或ものを想ふ、道德家は道德の理想を實現し實現して、つひに實現しつくす能はざる境に至つて、道德以上の或ものを思ふ。その不可測の深實在に觸るゝや揆一也。

(四月四日)

○ この中に詩

觀音に彌陀に、この他何に對しても一心に祈願を籠むる

あり道德あり

歸依の眼、敬虔の姿ほど、世に眞面目に、深奥に、また美しき姿あるべしや。理の解剖刀を容るれば、この中には依頼する主觀の態度に、其の崇拜對象其者に、さまざまの迷信もあるべしといへども、唯其の有限者が自己の有限を知つて無限者にたよる所謂「絶對的依頼」の感情は、理至り情至り、有ゆる哲學系統を絶したる人心至深の要求の發現として、これほど吾人を動かすものはあらざるべし。如何なる自力的宗教にても、この依頼の感情は姿をかへて潜み居るなり、奴隸的に神に依頼せずとも、その光明にあくがれて渴仰の誠をそゝぐは、取りも直さず一種の依頼の關係と見るべし。人は悟によりてよく神我同躰の不遍赫耀の境に至り得るとあれども、かゝる意識は長久には亘らず、人間たる間はいつ

プラトンの  
戀の  
スピノザ

祈願の一語  
何等美しき  
深き言葉ぞ  
や祈願とは何  
ぞや  
「嗚呼神よ」  
の祈禱の外  
業は要せず  
されど人は  
道德的傷痕  
愛の手を要  
せざるほど  
に萬能のも

も神と同躰の意識に在る能はじ。即ち神は客觀に、我は主觀にありて相健孚感應し、もしくは精進向上し、もしくは渴仰憧憬しつゝあるの状態ならざるべからず。これ皆有限の我が無限の神に打ち向つて祈願をこむる姿ならずや、  
「神よ」といふ聲は、これ他力ならざる宗教にも其の根柢に潜める至切要求の聲にあらずや。單に非人格的なる道德的理想を追ふ場合にありても、我等は罪業の棘に躓きて鮮血淋漓としてそゞぐをりは、ポロの如く「吁艱める我れ哉」の歎を放つて不覺天の一方に仰ぐ也。人が理想に對する無限向上者たる限りは、常に罪業の血に汚れざるものはあらじ、而して罪業の血痕常に絶えざるもの、誰れか我れに頼むべき神なし、我れに理性あり、我が理性よくわが癡痕をつ

このなりや又  
この要するを  
強はるるを  
要はるるを  
にありやく

現然の我は  
依然としは  
踏踏しは  
踏踏しは  
踏踏しは

理性に訴ふ  
なれは涙  
性を厲  
灰色の理  
理性の色は

つみて瘡やし得と揚言し得るものぞ。曾て理性に向つて罪業の癢を瘡やさんと求めたり、されど理性は峻嚴なる聲にて「爾は爾の善業によりてその罪を償へ」といふと冷かに答へたり。されば奮然として健闘の路にすゞめり、されど吁艱める我哉、荆棘益々塞がりて血痕ますます多し、再び聲を揚げて理性を呼べば再び答ふると故のごとし。嗚呼嗚呼人は理性の自力以外に頼むものを要せずと言ひ得るほどに無瑕のものなりや、強きものなりや、大なるものなりや、強きもの大なるもの我の中にありと意識す、されどわれは依然として現我の我、經驗上の我とは一段の高處に立つ我ならずや。嗚呼理性の力は偉也、されどそは果して罪業の血を拭ふ温き手を有するや。理性の命は嚴肅なり、其は正



れども理性は涙をもては理性の應へずには理性の眼に彼我融會しうする涙を浄うする涙を拭ふも涙は拭ふも

疾痛憐憫未だ曾て天を呼ばずんばあらざる也

人生は猶太人の所謂涙の谷也

自律的とは何ぞ

義の聲なり、ヘブライズムなり、エホバ神なり、目もて目を償ふ公正律の聲也。我等は果して、我等が弱點より來る無数の罪業をことごとく善業もて償ひつくし得べしや、然れども理性は然りと答ふる也。げにこの聲に起つて無限に煩悶しゆく、こゝに人生の沈々として偉なる戦はある也、我等は完全を望んでどこまでも進むべし、これ勇らしき丈夫の態度也。されど人生涙多し、我等は尙ほ時に道德的戰場にて負ひたる深手に感傷の涙をそゞぎて、神よ弱き我を拯ひ給への聲を揚げ、而して神の慈眼の涙をもてこれが拂拭を願ふ、これむしろ至情にはあらざるか、人この至情を強ひて壓して獨尊自大ならんとする、我れその果して眞丈夫の態度たるかを疑ふ。強てこの至情を、掩はず飾らず、我が全人

耶穌の血、  
の贖罪説の  
秘義  
に勝た  
ふにあら  
ず  
偉大なる道  
徳家ほど血  
泣かざるか  
而してその  
根本的要求  
に耳傾けて  
至高者を仰  
がざるか  
ナイチンゲ  
ールの涙  
「嗚呼神よ」  
といふ大膽  
なる一語を  
放ち得るも  
のほ一切の  
矛盾を解き  
得る也

を打ち出して、無限者に依りすがる心の囁きに耳傾けて、一路天上の慈眼を仰ぐ、こゝに天真不文の歸依、デァーシヨンの美しさはあらざるか。強ひてこの至情の聲に耳塞ぎて之れを打消さんとするは、これむしろ多方面富贍なる人生の實在を減縮する心なき所行ともいふべく、むしろ抑ゆべからざる至深の要求を聴取して、之れに相當の位地を與へてこそ、人生の詩趣は滾々として盡きざるを得るなれ、又まかしてこそ人生活動の一面は開かるゝなれ。誰れかプラトンの天地に對する戀を夢と笑ふ、誰れかスピノーザが神に醉へる恍惚を痴と笑ふ、誰れか耶穌が神を父と叫びし聲を狂と笑ふ、これ皆詩にして實也。一切の活動の底には崇拜あり、無限の驚はやがて崇拜也、歸依也、依頼也。

世に一月の清光を仰ぐ者し  
ては彼れを我等  
はありなき悲  
しむるなり  
格の如何は人  
問の神は  
其の強弱に  
願ふつて手  
にたり足と  
なり頭とな  
り涙と静なり  
或は寂なり  
神は人の格も  
題以上も問  
の也

我觀錄

この至深の要求を公明に認取して、小子の如く神に依りすがりて一身を打ち任せたるデブーションの態度、これむしろ人の性の偉なる所にあらざるか。理性を頼み自己を大として自己以上のものを認めざる我れはむしろこゝに我執の小見を見る。

誰れか眞に我は神也といふものある。「世に義人あるなし一人だになし」。耶穌だに我は神なりとは言はざりき。

吾人は神の温情の涙を得て道德的元氣一層倍加するを感ず。これなくしては道義の戦は、人生には餘りの重荷なり、餘りの荆路なり石道なり。

されど罪人衆  
の血を人の  
生其を意  
識してあ  
むしる男  
眞個を見  
なるを士

「世に義人なし一人だにあるなし」。釋迦基督の偉を以てするも、恐らく無瑕玲瓏として終始一點の曇を着けざる境にあり得たりとは思ふ能はず。基督に罪の意識なしとの論は、むしろ我等凡俗に比しての觀察にして、事實にあらざるべし、然るを我等凡俗のものをや。吁何人か其の道德理想に對して罪を得ざるものある。而してこの罪惡の意識は、單に他の善業を積で之れを償へばそれにてよしと満足するには、あゝ餘りに深き涙あり、深き歎きの聲あり。このをり吾等は胸臆の底にて「我等が他の罪を恕るす如く、我等の罪をも恕るしたまへ」と叫ぶなり、これ實に吾等が至切の要求の聲にあらずや。而してこれ實に倫理に宗教の高調

を帯びしむるもの也、こゝにては嚮きの非人格なる道德的理想は吾等が無限の悲歎を訴ふる神也、理想は光榮なき也。

(四月十二日)

つひに神とならずば人生至深の要求を満足せしむるに足らず。これを主觀の空想と斥くる勿れ、如此主觀の要求は、客觀をつゝめる主觀實在の深處より掲げたる要求の聲なり。

(四月十三日)

理想が神と  
なるはこれ  
吾人の情の  
論理的歸結  
也

我即神、我即實在と觀ずる儒佛等も、畢竟は無限者に對する憧憬渴仰の情、及び無限者に對して自己の小弱、あさましさ、果敢なき、哀れなるさまを打歎く心の親切熱烈が、この神我同體といふが如き一種の超絶的光耀の境に臻らしむる

なり。彼等もし心を虚らし、深く沈潜して、その心情の要求に聽かば、この境に到る前、一種無限の悲哀、そのとも志らぬこゝろの歎きの聲を聽き得べきなり。(全日)

われは、禪には大なる悲哀の潜めるを見る、彼等は概ね神我一體の悟の一面を見て、その神人無限隔離の悲哀をいはず、されどこれ唯言はざるのみ、無きにあらずなり、むしろ之れを言ふに堪へざるほどに痛切なる也。

人には世界大の悲哀あり、人の性の偉はむしろ實にこの大悲哀に觸るゝにあり。この大悲哀はいづこより來る、これ實に吾等が神を慕ふの聲にあらずや。吾等が神に對して打そぐ祈りの涙、世にこればかり深奥なる、詩と實在と

この涙に自ら  
執りて見よ  
大の剛健を  
脱して送る  
の生を也  
を得る也  
我は此の神  
を於て見る  
涙に於ては  
見るなり

を一にしたる高調の涙あるべしや、我等はこの涙によりて我等の有限性を超脱するを得るなり。我等が人生にありて、この涙をそゝがざるべからざるは一大惨事なり、されど又我等が根本的悲哀を和げなだめ、美しうし、高うし、慰藉して、道德の戦場に負ひたる傷を裹み痊やすものも亦この神に對してうちそゝぐ涙なり。我はこの涙の中に矯飾自矜の人性を見ずして、むしろ赤裸々露堂々たる人性を見る。現代の物質的偽善、爲我、自大、剛愎、陋俗の弊を救ふは人をしてこの根底の悲哀に觸れしむるにあり。人をしてこの悲哀に觸れ、之れを自覺せしむるものあらば……。

(全日)

敬の徳は通常徳中にて最も特異の徳、むしろ根本的のもの、或意味にて宗教的の徳なり。人と天とを括りつける徳は、この敬にとゞめたり、居敬持敬などいふ語は意味深き語なり。(中齋説、基督教、バイエチー、ピチー説、哲學雜誌第百七十五號等参照、支那哲學史中、明道)

吾れは人の合掌持念の姿のうち、いつも高調の詩を見るなり、實在を見るなり、人生の至深の要求を見るなり。詮じ來たればこれ人生の悲哀を神に向つて歎くものにあらずや。

嚴密にいへば、一切の自力的宗教は他力を根柢として立

「寂然照者」の境に臻るに、矢張り無限の悲哀あるべし。情を先天的に罪惡の如き唯だの如き眼を掩ふて見ざるのみ、彼等はおしへる涙を拭き、泣ける面をして涙なき涙を濺げ、ちを

つ。豁然大悟して我れの神となるとあるは、否むべからざる事實なるべし。されどこれ瞬間の事のみ、少くとも長久に亘る意識状態にあらず、遽然として我に歸れば、依然として神かしこにあり、我れこゝにあり、人生根本の悲哀は依然として纏綿せり、依然として人は涙なかるべからず、依然として神を慕ひ求め、祈り希はざるべからず、即ち少くともここに神の一種の感應道交なかるべからず、神の恩惠なかるべからず。而してこの意識、この努力の高調するや、また所謂悟の一境に躋るを得べし、而してこの悟や、畢竟神と我れとの感應の至極せる結果として來るものにあらずや、即ちむしろ神の恩寵というて可なり。この意味にて予は他力の意味を説かむとす、吁人は遂に自力自恃に誇るを得ざる

なり、悟は悲哀に華さけるものなれば也。 (四月十三日)

我等は強ひて、この人心の至情を抑ゆるを要せず、ストアや、カントや、老禪一流の如くに。これ又、理性と共に我等が光彩ある活動の一面なり、これに相當の要求權を看取するは人生の要事也。

○

禪の悟は餘りに抽象的なるが故に吾人の理想と合せず、これ禪ははじめより人性といふもの、人間といふものを誤解したるが故也、はじめより僻見を有して、情といふものを撥無し指斥して、その當然の要求を許さざればなり。禪の悟は餘りに知的也、形式的也、抽象的也、明鏡如々の意識當體を悟の理想としたる趣ある、この證なり。白隱などは一段

實在的、衝動的、活動的、積極的實在、一言すれば force と云ふやうなるものを悟の對境と見たりしが如く、やゝ異色の觀あり。いづれにしても情の要求を一切撥無せる禪の大缺點也。

○

吾人の道德的理想は、個人的にいふも社會的にいふも、人格的のものならざるべからず、人は人以外のものを理想とする能はず、理想はどうしても人格的のものなるべき也。さらば何故に天地の實體を人格的に見るを非とするぞ、人格的ならざる神は到底人間と關係なき沒交渉の神なり、人間の神はどうしても人格的の神ならざるべからず。勿論こゝにては、人格の義は、或空間に一位地を占めて人間の如

き悲喜の感情を有するものと見る通常基督教徒の所謂人格的の義にあらず。之れをスピノザぶりの神と見るもよし、唯それが吾人と無限の感應力を有して、吾人の全人(感情意志知力の全方面を具へたる具象の我)と交通を許して一種の活關係を有するものにしあれば、そは決して吾人人間と縁遠き、抽象的なる、冷かなる神にあらずして、どうしても我等の如き人性を根柢に具したるものと見ざるべからず。根柢に人性なき神が、如何にして吾人の全人の要求に應じ、吾人と感應健孚するとあるかは不可解なり。神は人間以上のものなり、されど同時に根柢に於いて人的のものならざるべからず。形こそ異なれ、形體的の意味に於てこそ從來の神學者クリスチャンの見解の如く、神は人格的ならず

れ、その根本の躰に於ては、つまり人的のものならざるべからず、人的ならざる神が人と交渉し得べき理あらざるなり。人格の語、之れを擴張し、醇化し、精神化すれば、神の人視観は深奥の眞理也。

○

人格は論理以上也。偉人は常に一見矛盾の多角面を具へたり、耶穌、ソクラテースの如き、この好一例也。彼等は蓋し無意識的天才の力をもてよく其の中庸を乗りたる也。その中庸を乗り得て誤らざるは實際的技能の力にて、論理もしくは計算の力にあらず、功利派などの如く結果の計算などによりて倫理は行ひ得らるべきにあらず。單に中庸とのみにては形式的也、如何なる所に中庸の軸を置くか。

予が儒教觀  
倫理的宗教  
としての儒教

問題也。

(四月廿一日)

○

孔子の意必固我を戒めたる、佛教の執着を戒めたると意相通ず、孔子の中庸の徳を稱へたる、佛教の所謂中道實相と似通へり。唯其の中庸なるものゝ内容が、佛教にありては消極的、虛無的、純理哲學的、儒教にありては積極的、實際的、倫理的也。佛教は無をもて理想とし、儒教は誠(もしくは敬)をもて理想とす。およそ佛教ほど虚無的傾向つよき教はなし。耶穌教また心の清淨を貴ぶ、されどそは唯だ謙虚質朴の狀を指せしに過ぎず。儒教はた意必固我を戒むれど、こは畢竟人心の「誠」を掩ふが故也。佛教は直ちに一切を空とし去る、少くとも一種無名狀の體を理想とす。

(四月廿二日)

## 人格と美術

ソークラテースなどは理論上其の倫理の中樞を明かに意識したるにあらざるべし、その人格は蓋しその倫理知識系の幾分非論理の點を補ふに餘りありしなるべし。何人も多少倫理の論理的方面を有すべく、又なるべくこの論理的要求に従つて行はんとすべし。されど學者ならぬ限りは、其の倫理の概念は如何なる偉人にも多くは不明なる所あり。彼等は論理上許多の徳の關係などを知識せるものにあらじ、唯彼等は直覺を以てよく中を擇び得て誤らざる也。これ實際的技倆なり、熟練也、美術也、人格は倫理知識と倫理美術との二面よりなる。

(全二)

儒教の性質を觀るには、其の主觀的方面即ち「敬」の方面よりするを當とす。儒教を單に祖先崇拜、漠然たる天もしくは自然を崇拜するものと見做し、もしくは宿命教など、見て單に淺薄なるものと評下し去るは當らず、むしろ誠は天の道也と觀じて一念の敬を守る方面に、儒教の一種の宗教的衝動あるを見る。この方面に於いて儒教はたしかに宗教に觸れたり、こは勿論倫理的なり、されど尙そは倫理以上の色彩を有す(ストア派との對峙、所謂倫理的宗教の意義、cosmological fact)の上に實行的原理を立つる所高調也、そは單に哲學としてのみ見るべからず。



儒教は崇拜對象を明言せず。その慎獨誠敬の語より見れば、即ち自己本性の中に一種の貴きものありて、こゝに神をエンシェインする也、自己崇拜教といふも可也、真我崇拜也。獨自を欺かずといひ、主一無適といふ如き語は、倫理以上の語也。少くともこゝに一種の感應あり、これ宗教的現象也、これ超自然に對する一種の交感也。單に人と人との關係に生ずる倫理現象を以てこれを掩ひつくす能はず（洗心洞劄記八五、六、七頁司馬溫公語參照、公の語、ユダヤのイザヤの犠牲を斥けたる倫理的敬神と頗る似たり、ルナン傳參照）。こは心學教といふも可なり、心に事ふるの宗教也。

（四月廿二日）

\* Pious, Holy の感情、Holy の感情の浮動を見る

爲少年

故川田博士が遠逝の數日前まで英語の研究に孜々として倦まざりし一事は學者の好模範也。博士に如何なる信仰のありて、死の近きにあると知りながら尙ほ英語研究を廢せられざりしかは知らず、唯常識よりいへば一種の矛盾也、而もこの矛盾の中に一種の味あり美あり調和あり、功利以上の意味あり。人は一面よりいはゞ永遠の爲めに學ばざるべからず、死に至るまでも理想に對する努力を抛つべからず、眞面目に自己を磨く爲めになしたる努力は不朽不滅なりとの信念なかるべからず、東洋風の無常觀は去らざるべからず。

（全日）

○ 蓋し個人主義の是認せらるべき點はこゝにあり（ゲーテ、

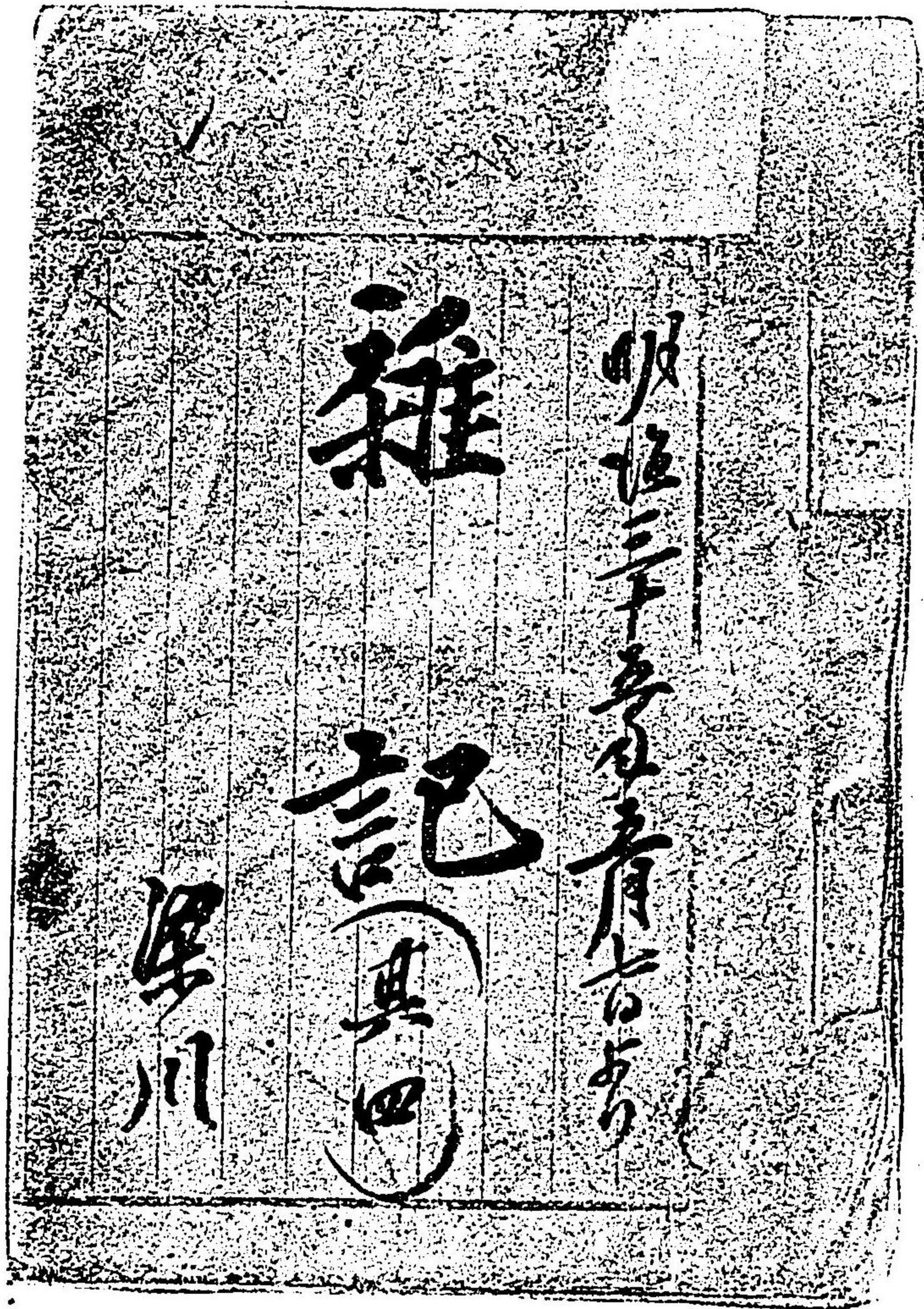
二つの高上なる個人主義

スピノーザ Higher Individualism) 人は單に社會の爲めに自己を磨くとあるのみならず、更に法界全體の爲めに自己を磨くの要求の至切なるを感ずるとあり。この場合の吾人の對象は、單に我等同胞のみならず、更に全法界其者を對象とす、我等は單に人間のみならず、天地山川草木國土一切の物を對手として一切物と我との關係を究め、一切物我を含めてを解脱せしめん爲めに心魂を碎くとあり。かゝる場合には、我等は法界の底に深く沈潜して直ちに實在の聲を聴かむとするが故に、其の態度は甚だしく個人主義の觀を著するとあり、スピノーザの如き是れ也。或は又自己の天才を確く自信して、人生を一大學校と見做して自己才能を圓滿齊一に發達せしむるに全力を費したる一種の個人

死に至るまで

理想を迫りて已まざる

主義あり、ゲイテの如き然り、何れも立派なる高上の個人主義也。



雜記其三畢

窓の庭うつくしき梅一樹

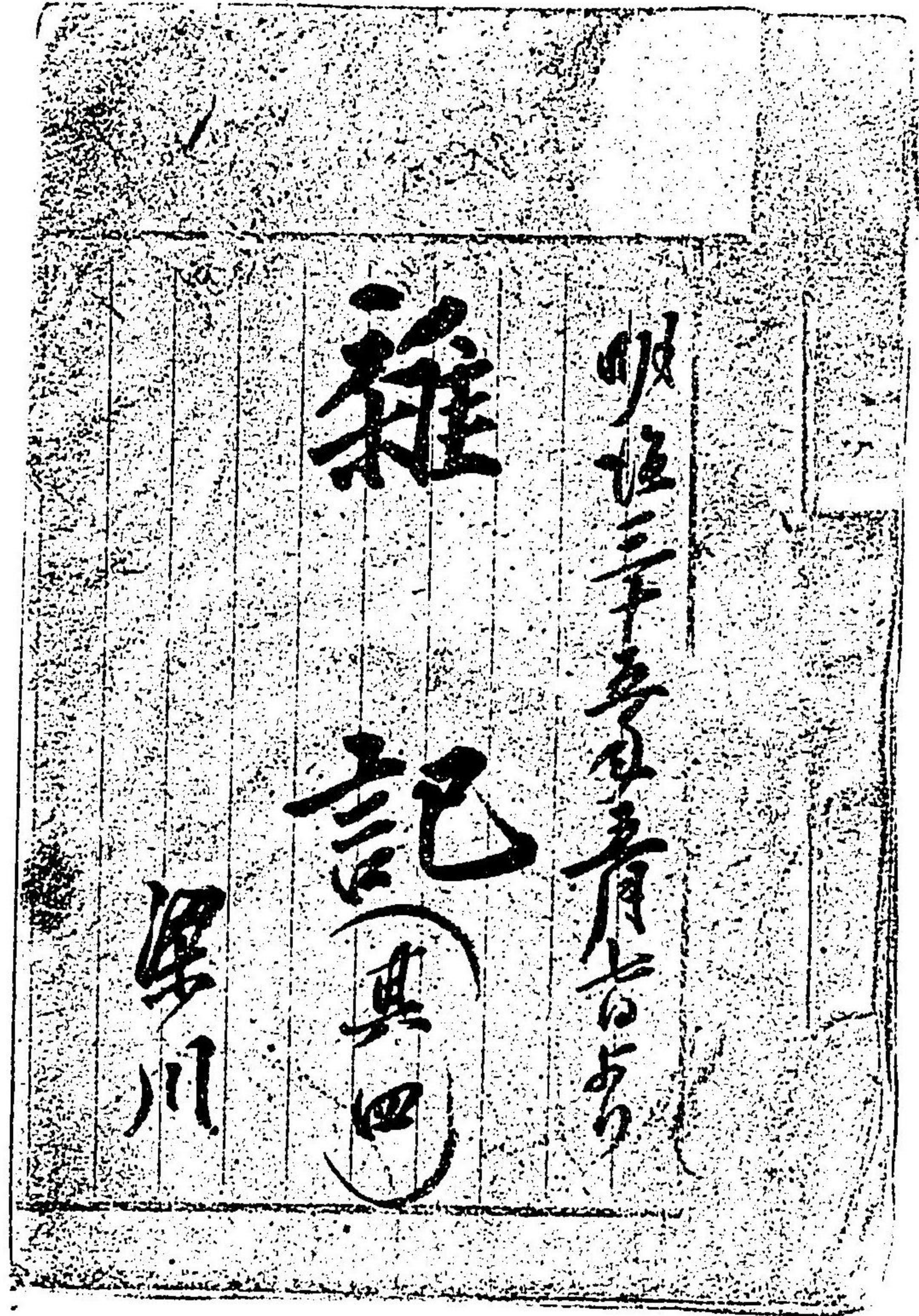
我觀錄

我觀錄

二八

鶯の庭うつくしき梅一樹

雜記其三畢



## 雜記 其四

○ 宗教的意識は、理性に反對しては自立するの權利なし、唯だ理性の交渉以上の境に其の本領を確立す。理性の上よりいへば、我等は物の現象以上、或物の實在するならんと位は言ひ得るも、これ以上に出で、其の實在の如何なる色相を有するかにつきては一言も發する能はず、この點に於いては、スペンサーの不可知的實體は吾等が知識の及ぶ最上の畛域なり、勿論嚴にいへば、我等の知識を現象以内に限り、ポジチivist一派の見解は狭に過ぎたり、もし吾等の知識

は現象以内に限るものとすれば、現象以外もしくは以奥に實體の存するをも吾人は如何にして知り得るぞ、スペンサーは感ずといへり……。尙ほこの論も詳論を要すべきものあれども、まづ大體に於て正鵠を得たるものと見て論ずべし。もし果して然らば、實驗論者は、實體の性質につき一切斷定的、積極的立言をなすを得ず、もし之れについて立言する場合には、唯まかなるべし、然らんなどいふ、アルラシゴト以外に出でず。彼等は、唯だ神の人的なるは我等の經驗知より推せば、どうも疑はしといふに過ぎずして、然らずと斷言するの權利なし、もし神の人的なるとが眞理らしく思はれなば、或は然らんと云ふより外なし。この場合には吾人は理性(知的活動の意味にて)によりて實在を把住

する能はず、實在を把住し得むには、理性は餘りに薄弱なり、無根據なり。吾人もし理性のみを有する動物ならば、吾人は永久に實在の何たるかを知る能はずして、唯だ消極的、懷疑的態度(實在に對して)に甘んぜざるを得ざるべし。されど我等は理性以外に情意の要求を有す、知的要求の満足のみにて満足する能はざる場合には、情意の要求自由に旺んに活動して、一己獨立の天地を創造す。於是我等の要求は實在を神と見るなり、道德的理想の淵源と見るなり。人の上に於て、而かも少くとも人的の完滿者として渴仰す、而してこの一境の事は理性の批評以上なり、理性もし之れに批判の刀を容れ得べしとするも、之は蓋然的批評以上に出づる能はず。吾人の情意、吾人の宗教的意識は、もと理性の要

\*この場合の  
理性(知)の  
活動(能)は  
情(意)の  
要求(能)に  
依りて  
活動する  
なり。

求を斥くる能はざる一元的活動なるが故に、この場合にも一面件の理性の蓋然的批評に聽取して、その要求をも満足せしむべしといへども、これ公平なる人心の至當の要求なり、要するにこの場合は吾人の至情の要求が第一位を占むるなり。吾人の至情もし神は愛なりと叫ばんか、勿論吾人は一應理性の要求如何と顧みて、その賛成を得まくすべし、或は理性は神を愛なりとするは、これ主觀を客在視するものとして反抗すべく、若しくは、少くとも理性の判別以上の事として是非の斷も加へざるべし、これ現象以上の境の事なれば、理性がかく謙退して是非の判を下す事は當然の態度なりといふべし。かくして吾人は理性の要求を顧みて、こゝに多少の踟躕なきを得ざるべしといへども、かゝる薄

弱なる理性の反抗もしくは消極的態度をもて、件の至深至切の要求を壓し去るの權利なきを知るべし。而してむしろこの至情の要求の創造的能力或は直觀に聽きて之れに従ふの至當なるを自覺する也。

○ 兎も角宗教的意識の要求は、客在と我れとの間の人格的交渉也。人格的に弊あらば人的交渉といふも可也、これ宗教態の特相なり。吾人は、宗教的意識の活動する時は、必ずや神を抽象無相に寫象せずして、人的のもの少くとも吾人無限の要求渴仰を攝するだけの具象、豐瞻の一實在と觀ずる也。かゝるものと見ずば、吾人はこれに無限の渴仰歸依を表する能はざるべく、こゝに感應道交は不可能也、これ、宗

敎家としての吾人は、到底哲學的世界觀にのみ満足する能はざる所以也。もし宗教的意識を根本的謬信と見ば兎も角、然らざる以上は、吾人は單に哲學的世界觀のみに據つて宗教的世界觀を排する能はず、この中に人心の普遍的客觀的要求を看取して、その特殊の位地を準許せざるべからず。されば神を抽象的に見ずして人的具象的に見るは、宗教意識の自然の要求として之れを是認せざるべからず。スピノーザにても、其の宗教的恍惚の刹那は、そのサブスタンスは餘程人間的性質を有し、情熱の色彩を帯びたるものとして現ぜしや疑ふべからず。佛家抽象の眞如も、其の宗教意識の活動する場合には、眞如は冲漠無朕のものたらずして、少くとも慈悲、忍辱、威嚴などいふ完全の人的姿を着し來る

傾あるは事實なるべし。吾人の宗教的客在は、吾人の全人を満足せしむべきものならざるべからず、さればどうしても、否、人は之れを理想的實在と見るなり。既に理想的といへば人的諸性能の圓滿相をこゝに意味せるなり、耶穌が天の父の完きが如く完くすべしといへるものこれ也。人間的たらざる神は吾人と交渉の縁なき神也。吾人は、時としては寂滅其者のみを理想とするとあるべし、されどこれは理想の一部としてのみ、我等の理想はかゝる人性の抽象的一部を得て満足するものにあらず、こは少くとも人心の健全態にあらず。理想はどうしても完全ならざるべからず、具象圓滿ならざるべからず、全人の要求を満たすものならざるべからず、即ち神ならざるべからず。而してこの神は人



的完全のものとして把住せらる、これ實に宗教的要求の特殊相にはあらざるか。

哲學者は、動もすれば神の性質を抽象し、瀟過し、削り、限り、狭め、貧寒枯瘦たらしめんとす。彼等は唯一己の自然法として、世界法としてもしくは秩序としてもしくは理法として神を見むとするなり。されど宗教上の神としては、如此は何ぞ内容の貧なる神なるぞや、如此は以て神と稱すべからず、吾人の理性直觀の對象たるに足るべし、以て崇拜の對象とするには足らざるなり。worship is worship ともある如く、吾人が崇拜の對象たるべきものは、吾人の全人の至情要求を満足せしむるに足る具象の神ならざるべからず。意味の富贍に

して具象的なるほど、そは吾人の崇拜對象として價値あるもの也。されば古來の偉なる宗教的天才と稱せらるゝ人は、吾等の根本の無限の要求を満足せしむるに足るべき、新しき富贍の神を掲げ出だして、從來の神の觀念に一步をすゝめ、以て革新の大事をなす、耶穌の神を父なりと叫びたる如き其著例也。從來の猶太の法律的、正義的神に比して、父なる稱は何等富贍の意義を加へ來たれるぞや、耶穌の神はデューズムぶりの人間以外に超在する有形像の神にあらず、そは人心の奥に潜めるアヴ父と呼ぶるゝ神也、さりとして其は汎神教ぶりの茫漠たる神よりも活如として生命ある神也。之れを父といへるに人視の弊あるに似たれど、これ實

に人界最富贍の語を藉りて、實在の無限の姿を髮髯せしのみ、耶穌に取りて此かる「父」といふ如き語をもて神を表象する外に深き富贍の言葉はあらざりし也。其を一個のシムボルといふ可也、されどそは實在の最も深奥の意義を語るシムボル也、宗教的意識の最も活生命あり、權威あり、客觀的價值ありとして肯くシムボル也……(雜記第三、參照、サバチエー參照)。

○ 何故に馬鳴は法身如來藏の外に應身報身を説きしぞ、何故にポーロは唯一神の外に耶穌を神化し靈化せしぞ、何故に古來人は多くの英雄を祀りて神となすや。これ實に、人類の宗教的意識は、此の如き具象的活生命ある對象を得る

にあらざればその要求を満足せざるが故也。馬鳴の法身如來藏そのものが抽象無色の實在にあらずして、無限の智慧、光明、慈悲、攝護の諸徳を集めたる、感應健孚自在力の一實在にあらずや。彼の法無自性といひ、眞如といふが如き、抽象的の知的直觀の對象をもて佛教の眞髓と誇るが如きは、これ取も直さず佛教を哲學に墮せしむるものにして、宗教としては最早生命なきを知らざるもの、言也。

○ 理性の冷靜なる抽象的直觀の神は、到底宗教的の神ならず、宗教的意識の要求は多かれ少かれ、吾等以上、一種の生命に觸れむとするにあり。生命なき宇宙の知識的体系、即ち哲學的世界觀は、以て吾等が知識的、理性的要求を満足せ

しむべきも、以て宗教的要求を満足せしむるに足らず。スピノザのサブスタンスは、其の彼れが宗教的情熱を以て一種の感應を之れに求めたる時は、斷じて冷靜なる哲學上の觀念たらずして、一種高上の情調を帯びたる、少くとも生命を帯びたる一實在として、彼れの要求に應じたりしや明かなり。通常吾人が、道德的理想に向つて向上する場合にも、それと我れとの關係の切實なるを感じて、アスピレーションの火燃ゆるときは、幾分イムバルソナルなる理想を人格化し生命化して、之れに宗教的高調を與へつゝあるなり。もし一步して件の道德的理想を世界の實在と觀じ、而してそれと我れとの關係の不離痛切なるものあるを意識し來らば、最早吾人は冷かなる單なる倫理的態度に止まらずし

\*藤樹が天を  
父として之  
に孝す  
れに孝す  
しといへ  
べしといへ  
る如きもこ  
の如きもこ  
の見るべし  
と見るべし

て、一種幽微なる宗教的意識の浮動し來れるを覺ゆる也。\*

吾等の神は到底符號の神也。符號以上の神は、スペンサーの不可知もしくはカントの物當躰の如きものなるべくして無交渉無關係也。もし多少にても實在の象を描かむとせば、如何に知的直觀の語を用ふるも、そはつひに人格化の色を脱するを得ざるべし、或は眞如といひ、意志といひ、理性といふも、これ既に幾分符號的命名にあらずや。科學的の言葉たとへば熱といひ、電光といひ、勢用といふも、これ一種の人視的符號といはれ得ざるにあらず、さらばまして我等が全人の要求を満たすべき對象の命名をや。我等が我等と活如たる痛切皚切の關係ある宗教的客在を把住するに

あたり、之れに意義富贍なる詩的言辭を用ふるは、これ實に我等の已むを得ざる約束也。生命は生命を以て表せざるべからず、我等が宗教的要求の進歩するほど其の符號的表現はた勿論進歩すべし、エル(勢力の神)よりエホヱ(正義の神)に進み、エホヱより更に仁愛の神アバ即ち父に進みたるは、これ實に猶太人の宗教的意識の進歩に随つて神の符合の進みたるものにあらずや。されば最も生命ある符號を發見するものは宗教的天才なりといひしサバチエーの語は味ふべきものあり、或は神を火とし、或は太陽ソールとし、或は驟雨シュタウとしたる幼稚なる表象も、曾ては人類の宗教的意識に生命ある活きたる言葉として響きし也。如何ばかり表象の言葉即ち符號は進歩すとも、そはつひに人類の要求に應ずる

\*生命の符號即ち人的符號以上には出てざる也。人類が人類として存せん限りは、その神は少くとも人的交渉人的感應の對象たるべき神たらざるべからず、我等幼稚なる人格觀を排す、されど一種の人視觀はつひに宗教の界には除くべからざる根本觀念なり。もし幼稚なる人格の觀念を排すると共に、一切の人視觀を迷謬とし去るものあらば、これ猶薰共に刈るもの也、少くとも宗教的意識の性質を解せざるもの也。生命ある對象は宗教的意識の所造にして、これ美的意識が美の對象を造り、道德的意識が道德上の理想や判斷を造るが如くもの、人心の一部面をなして、他の爲めに沒了せざる特殊の位地を占むるものと見るべきなり。於是か馬鳴が慈悲の法身を説き、基督が愛の天父を説くも、

宗教的意識には不磨の眞理となつてひびく也。これらの眞理と、富士は崇高也との美意識上の眞理、もしくは忠孝は善なりとの道德的意識上の眞理と、その客觀的價値に於いて幾許か異なる、これらは無論人文の進歩と共に變遷なきを得ざるべしといへども、少くとも或時代或社會にありては眞理として許すべきなり。或は符號は主觀的表象なれば客觀的眞理にあらずといはむか、一切の名はすべて符號なるを如何せん、嚴にいへば、一切の知識も吾人の主觀的形式を加被して造りいだせるものなりとせば、一切これ符號にあらずや。されば兎も角も宗教的意識の發達せる人が之れを眞理と認容し感受する限りは「天父」の符號も眞理たらざるべからず、これ最も生命ある言葉として人類の宗

教的意識(少くとも進歩せる一部の<sup>人</sup>)にひびけば也。

而して尤も生命多きものは吾人の道德的生活の理想なり。於是か吾人は理想の衣を神にかけて「天の父の全き」が如く我等も完くすべしといふに至る。正義の神といひ、慈愛の神といひ、もしくは攝護の神などいふ、これ實は吾人の倫理的理想を神の性質として仰ぐものにして、而して是れやがて神の人格化ならずして何ぞ。或人は神を倫理化すると人格化すると別物と見て(井上博士の如き其一例也)人格化を排すれども、これ頗る不適の論、非科學的の論也。幼稚なる人格化の不合理なるは、既に希臘のむかしクセノフアチースの痛罵の下に仆れたり、されど宗教的意識の根柢が神

の一種の人格化以上に出てざるとは、宗教的知識論の不動の主張なるべきにはあらざるか。神を精神的といひ、正義の意志といひて、尙ほ一面人格化の語を否むは、これむしろ耳を蔽うて鈴を盗むの類、強ひて人格の語を幼稚膚淺の義に解して其の深奥の意義を見ざるものなり。或は神は主観理想化のものならば、これ人の自ら造れる神にして客観的の神にあらずといふの故を以て眞實ならずとするものあり、されど前來論じたる如く、宗教上の神は宗教的要求を以て摺みたる神、我が宗教的感情を以て寫象せる神にして、これ以上の神はよし客観に實在すとも、其は縁なき交渉なき感應なき神也。一種生命のシムボルを通じて見たる神こ

を宗教上の神にして、こは一面主観的所産なると共に、其の所謂主観的の義は、嚴には要求といふ主観の胎を借りて顯現したる客観的の神、更に言ひかふれば要求といふ主観的プロセスを経て、吾人の經驗的意識に現じたる神なるが故に、吾人は之れを意識すると同時に、其は一種枉屈すべからざる、儼然たる客観的權威を以て蒞み來る、吾人が意識の要求上神を造りながら之れを拜せざるを得ざる所以は、こゝにあり、其所謂主観的は一時のすさびといふ意義の主観にあらざる、以て知るべし。天才は新しき意識を造る、而も其は主観的創造以上なり、自ら造れるもの、同時に自らを律する客観法たるなり、この義實に宗教家の神の意識に見るべき

也(早稻田學報參照)

○ 禪の如きはこの符號を排せん。不立文字といひ、教外別傳といひ、直指人心といふ、彼等は即ち言語文字を以て實在を表象するの謬をいへる也、少しにても符號に執すれば言詮に落つといひ、指頭を見て月を見ずといひて之れを排する也。實在は言語道斷、心行所滅の境也と説く、されど彼等は此く言ふと共に其一種表象的に實在を把住しつゝあるは否むべからず。こゝに於てか或は曠劫無始の真人といひ、不生不死といひ、本來の面目といひ、本地の風光といひ、一種詩的の語をさへ用ひて之れを言ひ表せるを見る。かゝる言葉は勿論シムボルなるべし、されど此かるシムボルが

各人の宗教的意識に生命となつて響くが故にシムボルも貴きものなり。されば眞言宗の如く、阿字本不生などいひて其の眞言即陀羅尼を實在其者の如く貴ぶは、勿論迷謬なりといへども、此かるは畢竟言語文字が宗教的客體の豊富の意義を我等に傳ふるの媒たるが故にして、所詮表象なくば吾等は神と接するを得ざる也。固より表象は到底宗教的客體即ち神の豊富の意義を荷ひ盡くす能はずして、表象(父、エホバなど)はいつも神の前には貧少の姿なきを得ざれど、天才出て、新表象に無限の意味を盛りて叫ぶや、神は實に新なる生氣を以て我等の前に現るゝの觀ある也。シムボルも天才の創造せるシムボルは、活如たる生命を帶て吾等の生命と交渉し來る也。

○ 神人同形同心の義にての人格を神に附するは妄なるべし、又我等人類の意識的統一を神に歸して、この意味にての人格を神に附する、これはた妄なるを許すべし。この二意義の人格は井上博士の否む所にして、また我等の否む所なり、されどこの二意義の人格を神に附するの妄を破しだせば、神の人格觀は一切破れたりとせむは淺薄の見なり、問題は尙ほ深處に残れり、これ井上博士の未だ觸れ得ざる處にして宗教の根本問題なり。博士の滔々の論も、詮じつむれば、神は我等が所謂人格と同視すべきものにあらずといふ事に歸す、思ふにこれほどの事は、少しく現代の科學的思想に觸れたるもの、博士を待たずしてとくに知れる所な

り。我等の見る所を以てすれば、神の人格問題は尙ほこれ以上の點に伏存するを見る、この一點に論鋒を突き入れずば、人格論の根本問題は毫も解釋を得ざるなり。博士は人格論の枝葉をのみ刈除して、其の地中に盤桓せる深根の生命には少しも觸れずして、我よく既に人格の問題を料理し得たりとなす、妄も亦甚しといふべき也。 (五月十九日)

○ 井上博士の如く神を倫理的意志の如く見る、これ既に人格觀の一片也。思ふに神は我等に取りてどうしても一種神祕のところあるべし、燭照數計することの出來ざる無限不測の神祕あり、朦朧あり、或は實に禪家のいふ如く、實在は言語道斷、心行所滅のものなるべし。されど我等が神を我



等の理想とし、我等の歸依渴仰すべき實在とし、我等の全人と活きたる關係を有するものとせむには、如何にしても其姿を髣髴せざるべからず、これ實に人心の要求なり。全くの不可知や、單なる物當躰などいふ如きものは、我等の崇拜する能はざるもの也、而して既に之れを描くとならば、人的符號をもて描く外他に道あらんや。勿論神の神祕性は一面どこまでも殘存すべく、神の全き姿は到底我等人種の眼に映出するものにあらず、全く人の知悉し得るものは有限にして無限にあらず、唯だその神祕の匂ひを傳へて、我等が渴仰の念を満足せしめんとするや、こゝに人格的符號を用ひて、其の盡きざる生命の面影を標出するの、外道なきなり。我等は一面に神の人格性(我等の人格性と同様の)を否むべ

し、其の意識の統一性(我等と同じ統一)をも否むべし、されど尙ほ神に對する我等が宗教的要求を言ひ表さむとせば、到底何等かの人格的符號を用ひざるを如何にせん、これ實に人性の約束にしてまた人心の要求なり。神を指して至善といひ、理想といひ、或は眞人といひ、或は父といふ、皆これ一種の人格的符號をうつして神に加へたるもの、或は客觀的哲學的にいへば、神は至善以上、理想以上、眞人以上、大我以上、父以上のもの、即ち一切人的符號以上に超出するものなりといひ得らるべし。されど此く見たる神は、最早我等と交渉なき神、風馬牛の神、何等の痛痒を感ぜざる無の神にして、我等と交渉あり關係ありて、我等が渴仰の本尊たる神は、件の人的符號もて言ひ表されたる神なり。勿論件の不完全

なる符號もて神を掩はんとするには、神は餘りに神祕に過ぐ、されど我等が活きたる神として心を躍らしむる神は、件の符號的意義を中心として我等に映ずる神なると、否むべからざる眞理也。

(全日)

○  
例の客觀的觀察を以てすれば、我等の當來は人的以上の不可解のものたるやも知れず、これ井上博士の論の如し。されど此くの如きものは我等に用なし、關係なし、此かる空想は空想として我等に何の益もなし、唯我等人類たる今日の位地にある間は、どこまでも人的關係の中に解し得らるべき理想を描くの外なし、全く人的以上の不可解のものは我等の神たると能はざるなり。博士の如く、もし當來の人

迷信論に用ふる

類を人格的とするを越權とすれば、その倫理的實在觀も越權ならずや、客觀的にいへば、神は倫理的實在を超越するものなるやも知れざればなり、即ち *ought to be* の命令を發する正義の神にあらずして、寂然觀照の美的實在たるやも知れざれば也、嚴にいへば、客觀的論法を以てしては我等は一切神につきて立言するの權利なきもの也。されば我等はつひに宗教的立脚地に歸り來らざるべからず、こゝにては法則が生命を壓せずして、生命が法則を造る、我等が情意の實在的要求は、生命ある言葉もて神を寫象し、把住せずんば已まず。或は慈眼の神といひ、或は正義の神といひ、或は眞人といひ、或は如來といひ、彌陀といひ、佛身といひ、天父といふ語は、まかく詩的、主觀的、人格的にして、而も我等が情意

吾人が神を  
生命あるも  
的の一種と  
見るは吾人  
的實踐の直  
觀の實現の  
要事なりと  
求むるが爲  
り。因果の立  
たざるに於  
て。理性の微  
少なるが爲  
す。後世の宗  
教の問に於  
ては。宗教外  
の實踐の爲  
す。後世の宗  
教の問に於  
ては。宗教外  
の實踐の爲  
す。

の根本的要求と相觸るゝ所に於て一味の普遍的客觀的確  
實性を有して、他の冷索なる哲學的世界觀と併立して相讓  
らざるの位地を吾人の意識界に占むるを見ずや。宗教は  
生命也、神人間の活關係也、我等の生命と神の生命と相涉り  
てこゝに健全感應の宗教的現象を生じ來る。かの冷索な  
る思辯的哲學に慣るゝの頭をもて、眞に宗教の人格的側面  
を幼稚なりと斷ずるもの、未だ佛陀基督の宗教的意識に參  
じたるとなきもの、未だ宗教的眞理の特質の何物たるかを  
知らざるものといふべし。  
(全日)

○  
人の神を人的のものとするか、いづれかのプロセスを経るにしても、到底この要求を實現せしめざるは止まじ。前者の例には希臘の神が全然人的形跡心情を有したりしあり（勿論これは神話觀にして幼稚なりしが故に、次第に高上に醇化せられ、淨化せられて、一時的、偶然的、形體的、感覺的渣滓を着けざる純靈の唯一神とせらるべきが自然なれど、いづれにしても神を人的に見るものなり）。後者の例は、馬鳴が歴史上の佛陀を法身如來藏と理想化したる如く、ポーロが基督を靈的模型的の神と同一躰となしたる如き、その一例也。

\*婆羅門教が  
ウパニシヤ  
ツドの梵を  
人格的の梵  
天(Brahma)に  
例たるその一  
例也

佛身論  
基督論

○  
科學は宗教的感情の生命觀に對しては到底一指を着く  
るの權なし。科學はよく我等の宗教的要求が神に對する

寫象もしくは把住の符號シムボルを批評するを得べし、其故何となれば、神の附名即ちシムボルは、一面吾人の知識をもて發明し創造しいだせるものなるが故也。されどかくの如きシムボルを造るに至れる根柢の宗教的感情に對しては科學は批評の權なし、シムボルは知的のものなれども此かるシムボルを結び出だせる動力は宗教的感情也、神に對する吾人の生命觀なり。吾人の宗教的要求は神を一種生命的に觀じ、これに吾人全人の本體を仰がずば已まざるが故に、この要求に應じて吾人は一種生命ある言葉、符號を神に附して呼ばざるを得ざる也。勿論其の符號の知的一面が明かに當時の科學的知識と背くに至れば、吾人は理性の要求に迫られて其の背理不合理の分子を排除すべし。されど

ケプリレオ、  
ニエーレン、  
ダーウキン、  
等の科學的  
發見が從來  
の神の寫象  
の符號を興  
ふべからざ  
るに至らざ  
るに其の一  
例也

科學はこれ以上に進みて、吾人の宗教的要求即ち神に對する生命觀を批評するの權なきが故に、神に對する吾人の生命觀は一層高上醇雅とこそなれ、決してこれが爲めに破壊せらるゝものにあらず。されば吾人は舊來の神の符號の舊衣を脱して、更に高上にして當面科學と矛盾せざる新符號を以て神を呼ぶに至るは自然の數也、苟も人心根柢の生命觀にして滅せざる限りは、神の符號化は熄まざるべし。されば科學は其の符號が明かに自己の要求と矛盾せざる限りは、謙讓の態度を取りて自家領分以外に出づべからず、これ實に科學と宗教との正當の分岐點にして、二者の本領を明かにするは一切無用の論争を避くる所以也。

○

萬有神教は宗教的意識の美的方面を満足せしめ、唯一神教は其の道德的方面を満足せしめ、この二者の合一せるもの吾人の宗教的意識の全躰を満足せしむ。萬有神教は動もすれば美的、神祕的宗教とならんとし、唯一神教は動もすれば倫理的、法律的とならんとす。一は理性を偏重する一元的自律教とならんとし、他は感情(依屬)を偏重する二元的他律教とならんとす。

信仰

吾人が宗教を信ずる根據を幸福もしくは安心等に置くは一種の快樂觀なり、かくして吾人が神佛を崇拜し、それに歸依するは、畢竟涅槃の淨樂を證して佛果を得るためなりと説く佛教の如きあり。佛教は吾人の崇拜の對象と理想

地とを區別するの氣味あり、吾人が三世の諸佛を敬禮するは、畢竟其の大慈の御手にすがりて涅槃を證せんが爲めと説く、こゝにては禮佛崇神は吾人が或目的地彼岸に達する一種の方便即ち導師なり、渡船師也。神と理想地とを別つ、これ果して眞の宗教態といひ得べきか、餘りに external 且 hedonistic にはあらざるか。方便として佛陀や阿彌陀や大日如來の力を藉る也、之れを崇拜するは方便としての崇拜也。佛教は餘り「安心立命」といふ目的に偏したり、されば佛教は無神を本躰と立つる也、自力にて知見を開き、法性を自覺して悟に入るが本意なり、佛に歸依するは自悟の力なき劣機の徒の慈悲の手段也。

宗教上に所謂感應とは何ぞや。我れ神にパンを求めて、神、我れにパンを與ふるが如き意なるか、如此は餘りに淺薄に失するの意義也。感應は客觀的に外より來るものにあらずして、吾人の祈、吾人の祈求其者の中に經驗せらるべきもの也。「嗚呼神よ」と中心より吾人の叫ぶは、既にこの中に感應の素はある也、神の靈は外より來りて我等の要求に感應するにあらず、吾等の要求祈禱其者のうちに一種微妙なる神の言葉は聽取せらるゝなり。故に如何なる祈にても、苟も真心より出でたるものならんには神の感應あらずといふとなし、嚴にいへば吾人の祈其者が既に神の根本生命に觸れたる感應也、道交也、天眞の悲哀を神に打出して泣くところに既に慰藉あるなり、悲しむものは福なり、其人は慰

を得べければ也との耶穌の語味ふべし。

(六月四日)

神の生命の摺みかたの幼く粗雜なるの故をもて、漫に之れを迷信として排する勿れ。勿論幼稚なる信仰には迷信の附着あるべしといへども、其中に包まれたる生命は無價の寶珠なり、彼等は其の迷信の包被の中にも、この生命との感應を得て安立せるなり。其の機根相應の宗教といふ點よりいへば吾人に之れを指笑するの權利あるなし、吾人も亦吾人の機根相應に神を見、神と觸れつゝあるなれば也。宗教はすべて機根それくの宗教にして、わが機根と適せざる宗教は如何に高上深奥なる宗教にても何の用にも立たぬもの也。牛馬は草を食つてよく其の生命を養ふが如

く、吾等の見て劣等とする宗教も一部の人心には無限の價値ある宗教なり、勿論高きに居るものは卑き機根の徒を教導する義務あるべきなれども、一面に於て卑き機根の徒に應病與藥的にそれ相應の宗教を興ふるは慈眼あるものゝ不忍心なるべし。多少の迷信の附着は已むを得ずとして一刻も早く神の生命、神の慈愛を味はせしとは先覺者の慈悲心なるべし、耶穌の如き、釋迦のごとき、皆これなり。唯この種の方便は、一方に教化といふとを伴はずば他を愚昧視して、方便を方便として用ふるに至るの虞れなきにあらず。佛教にはこの方便觀が餘りに極に走りたり、眞に已むを得ざる場合の方便、即ち教化を補ひつゝ行ふの方便にあらざれば方便は貴からず、始めより方便を用ふべきものぞ

といふやうに見做せるは弊也。

(全日)

自力と他力

自力と他力——猿猴派と猫母派。聖道門と淨土門。アルニアン派とカルビン派。觀心と信仰。ハーゲルとシェライエルマッヘル。

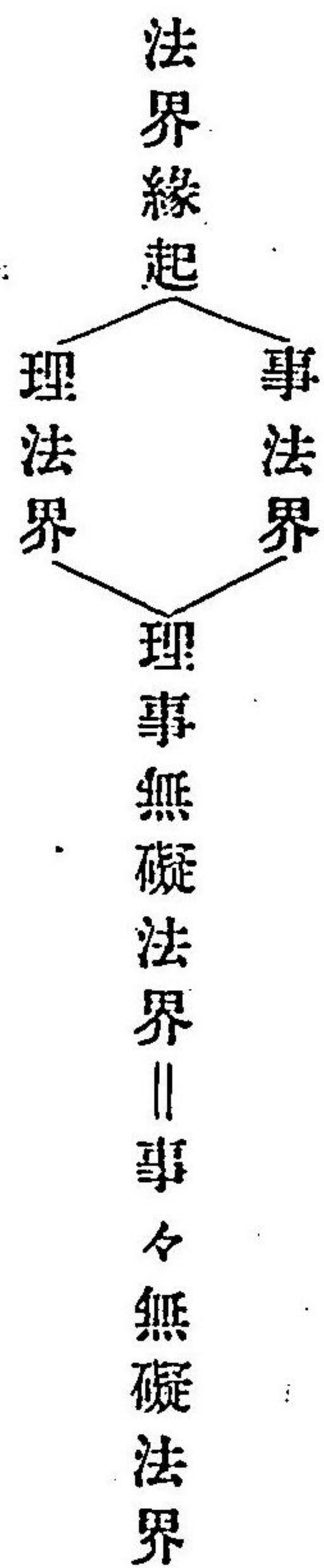
教理と觀心

佛教には、教理の外に觀心法、即ち實踐法あり、教理を自家觀心工夫の具とする也。單なる教理の認識は知的満足にして宗教にあらず、之れを實際的要求、動機の下に羈して始めて宗教的となる。佛教を哲學といふ、當らず、其の哲學的方面は畢竟佛教の悟の方法のみ、其の動機と目的とは宗教的也。

○ 古京(奈良朝)六宗即ち三論、成實、法相、俱舍、華嚴、戒律の六宗は皆當時學者間の研究にして、當時の寺院は一種の學問所たりし也、俗間には卑俗なる快樂的宗教行はれたり。

吉祥天女の淫行  
如きは淫行  
をさへ人に  
行はしめた

○ 佛教の天部即ち諸天善神は、快樂幸福を與ふる快樂的神として崇拜せられたり、故に之れを護法善神といへり。



○ 華嚴の法界緣起觀中にはバルメニデースを容れ、ヘーラクライトスを容れ、ヘーゲルを容れ得べき點あり。

○ 觀理即ち抽象的認識の方法を以て宗教的要求を満足せしめむとする佛教は、根本的矛盾を犯せるものにあらざるか。一切の情意、一切の煩惱を滅して、單に知的活動にのみよりて安心せむとするは、我等が根本の宗教的要求と矛盾するもの也。宗教的要求の根本は情なり、衝動なり、渴仰なり、忻求なり、隨つて其の己れに得て満足せんと欲するものは、必ずや是等の情意的活動をもて攪みたる生命ならざるべからず、情は情にのみ向上し、あこがれ行く也、生命の要求は又生命也。然るに佛教は、其の根本動機に於ては燃ゆる



が如き情意の要求より出立しながら、中途に於ては情意を撥無したる純知識的世界觀、人生觀を展開して、これを以て宗教的要求を満足せしめむとす、これ矛盾にあらずして何ぞや。一面に情意の要求より出立しながら、他面には單に知的認識の結果を以て安心を計らんとす、否むしろ根本の情意の要求其者をも排し、一切の慾望意志を擺脫し去りたる、灰身滅智の空寂觀(涅槃)に其の安心を求めんとする也。これ安心を求むる意志其者をも迷妄として無念無想ならんとする也、これ論理の自殺也。

○

佛教はまた、まづ教理即ち哲學的世界觀、人生觀を立して、これを土臺として觀心せんとす、其の哲學的方法なるを知

哲學的安心  
と宗教的安心

るべし。宗教的要求は宗教的世界觀即ち宗教的方法によりてのみ満足せらるべきに、佛教は根本の要求に反したる異原理を與へんとする也、これパンを求むるものに石を與へたるの觀あり、生命を要むるものに認識のみを與へたるなり。佛教は知によりて強ひて情を抑へ、壓し平かならしめんとしたるが故に、其の實行に苦澁なるふし、無理なるふし、不自然なるふし多き也、スピノーザのいへる如く情は情をもてのみ抑へ得らるべきものを。されば佛教が兎角高遠難解に失したる反動として、一面には極めて卑俗淺薄且快樂的なる、而も實際の人情に應じたる宗派出來たる也。我が鎌倉時代に、奈良平安朝の佛教理論の盛行の反動として幾多の平易實際的宗教即ち禪、天台、淨土、日蓮等の出てた

る其例也。

(六月五日)

佛教の高遠なる方面は概ね哲學的安心なり、スピノザ、ショーペンハウエルと異らず。其他の一面は快樂的卑俗の宗教也、眞個宗教として高尚なるものはむしろ馬鳴等にのみ見るとを得るのみ。知を重んずるが故に随つて一切の情を無明煩惱と見做して、厭世觀に墮するは自然の數也、佛教の大弊也。スピノザにも此の一面あり、畢竟唯知的解脫法の過りなり。

○

我れ、曾て、ひねもす山阿水涯を彷徨ひて神を求めたれど神在まさじりき。翻つて我心の奥を省みて、こゝに神在を感じたり。神は我が要求の祈り出だす所のもの也、我が至

誠の凝つて造り出だすもの也、我が心の溢るゝばかりの敬虔の情の生みいだすもの也。されば神は人の造り出だすものなるは否むべからず、而も其の造るといふ意義が、一時偶然のすさび心にて造るの義にあらずして、人の本性の必至より來る創造の義なり。随つて吾人の造り出だせる神は、同時に吾人を律する客觀的權威を帯び來るなり、即ち神は吾人の主觀の要求の所造なりといへども、かくして現し出でたる神は同時に實在にして、もはや空想の塊にあらずるなり、吾が自ら造るものが、同時に吾れ自らを律する權威たる也、猶道德上の理想は吾人の造り出だせるものなれど、其が同時に客觀法として吾人を律するが如し。思ふに自ら造れるものが自らを律する、世にこれほど自由にして生

命あるものはあらず。神もし外より來つて押しつけに吾人を律せんか、吾人の理性は之れに反抗して平かならざるべし、如此は他律的、外的、偶像的の神にして、吾人はかゝる神に誠心より交り祈り語る能はざる也。唯わが本性の自然の要求より認むる神、わが理想の本體として仰ぐ神、如此神にしてはじめて父と呼び得る自律的なる眞の神なれ、如此神にして我等が全心全人の理想として日夕慕ひあこがるる神なれ、基督が「我父の完きが如く爾曹も亦全くすべし」といへる神は即ちこれなり。如此神は吾人の理想として造りいだすものなれど、而もそは主觀的創造以上に超越す、其は本性の必至の所造なり、性の必至より出づる底に深奥なる客觀的基礎を含むなり。故に吾人が神を認むる心理的

順序よりいへば、神は吾が心の造り出だして客觀化したる趣あれども、實跡學上より神の存在の順序をいへば、勿論神まづありてさて後吾人が發見する也。唯其の發見は人心の要求といふプロセスを経ざるを得ざるが故に、吾人の實驗の上よりいへば神は吾等の創造したるものとなる也。吾人の經驗的意識の上よりのみいへば、神はどこまでも吾等の要求を外にしては求むべからず、主觀的要求が造り出だしたりと外考ふる能はず、經驗上、唯かくして造りたる神が、一種因果の現象以上の廣大なる權威を以て吾人に蒞み來るが故に、吾人經驗的意識の上よりのみいへば、其の何故たるを知らず、何物のおはしますかは知らねども、覺えず歸依の頭を下げざるを得ざる也、唯かゝる權威の大に打た

『論語』第一  
卷二〇參照

れて我が神よと叫ぶ也。宗教的意識が一種の理窟もて説  
けざる境といふは實にこゝの事なり、其何故にかゝる廣大  
なる權威を有するかは即ち宗教哲學の考究すべき領分に  
して、吾人の略解は前に述べたる如し、かく説かざれば、單  
なる主觀的所造が、何故にかゝる權威を有し來るかを釋く能  
はず。フアイエルバッハが之れを一片の主觀的空想視せ  
る如きは太謬也、こは實に宗教上の實驗上に參するものに  
あらざれば解しがたかるべき事也。吾人の經驗的意識は、  
唯だ我が性の要求に迫られて神を感じ、主觀的に造る神に  
觸るゝ意識あるのみ、而して之れを理性の上より合理化す  
るは學者の分也。

(六月六日)

要求といふ心現象の根柢には、不可測の深さあり。叩

けよさらば開かれん、求めよさらば得られん、叩くこと  
求むることが宗教の第一義也。要求其者が既に神の  
一指一脚に觸れたるなり。神人合一の實躰界の境を  
自ら憶ひ出だしたるもの、即ち要求といふ現象也、形而  
上の解釋也。

○  
むしろ主觀の要求其者が神の本躰也。吾等は要求を  
有するに於て既に神と觸れたりといふことを得

耶穌の神は耶穌自身の人格の反射的寫象也。いと高き  
ものは忘恩者及び不善者にまで慈愛を施せりと彼れが言  
ひし神は、取りも直さず彼れが一代の性行殊に十字架上に  
實行せる理想にあらずや。基督教の神は基督其人を離れ

ては解すべからず、基督の偉大なる理想が客觀化せられたるもの、やがて彼れの神也。人は到底己れ以上の神を見る能はず、一人ありて其の信ずる神偉ならば、これ其の人の人格の偉なるが故也、人を離れては神は解すべからず、フョイエルバツハが神學は究竟人類學なりといひし意義は一面深き意味ありといふべし。

○

孔子の仁の義極めて廣し。天といひ道といふもの、本躰は即ち仁也。仁は衆理を綜貫して渾然たるもの也、之を人に得たる上より仁といふ也、天地の一種の人格化といふべし。

○

凡神的人  
と一神的詩人  
禪趣味  
廬山烟雨浙  
江潮

高個人主義

孔子罕言利與命與仁、蓋し孔子は深奥幽微、俗耳に遠き事は言はざりき。されどこの故をもて、彼れは一切宗教上の事に關心せざりきとやうにいふは獨斷なるべし、むしろ關心の大なる事ほど、重大深玄なる事ほど、濫りに口に發せざるが孔子謙讓の態度なりしなるべし。されど其の迅風雷雨には必ず變ずといひ、天何をか言はん、四時行はれ百物成るといひ、罪を天に得れば禱る所なしといひしなどに考ふれば孔子、蓋し一種の天地の生命を感得して默識神契せし所ありしなるべし。其の誠敬の念の盛んなる、宗教心無きもの、然る能はざる所なり、其の從容天を楽しみ、樂只の風標如何てか無宗教家といふことを得んや。宋儒が天者理なりと釋したる、餘りに主觀的一解也、孔子の天は一種の倫

理的生命を帯びたるやうに思はる。

迷信論に入る

曰く天道、曰く天徳、曰く天法、曰く天意、曰く天何をか言ふや、四時行はれ百物成る、曰く天道親なし唯だ善に與みず、曰く天の父は日を悪者にも善者にも照らすと、是等皆天地の倫理的人格化也。吾が道の本躰、理想の本躰を天地其者の實在に認めんとするは人心の至深の要求也、もし天地の根柢に此かる倫理的高調のあるありて、吾人の道德的意識と呼應し、感格するとなくば、吾人は靈性あるものとして到底安きを得るとあらざるなり。「逝者如斯夫、不舍晝夜」と孔子が川流の不息の活動を見て歎ぜられたるも、亦實に道の本躰を自然界の中に認めて、一種の知音に遭ひたる如き至

深の悦樂を感ぜられたるなり、之れ豈に一種生命との感應にあらずや。偉人は皆天地を相手として其の心魂を磨く也、彼等は天地の中に我理想の法音の高く響けるを聴取する也、山川も草木も、無量の法音を語る佛身となり長、廣舌となる也、野の百合花、空の鳥にも神の御榮えの宿れるを認むるなり、彼等に取りては一切神徳天道の顯現なり、符號也。「知者樂水、仁者樂山」何故ぞ、聖人に取りては水や、山や、化學者、理學者の考ふる以上の倫理的生命をもて現るゝなり。此く見る、單に遊戯的に理想化して見るにあらず、彼等は自己の理想を外界に寫して、見ざるを得ざる必至の要求を有するなり、強ひてわが空想の衣をつけて自然を生命ありとするにはあらず。

○ 迷信は漫に説明し去るべきものにあらずして、まづ深刻なる同情を寄すべきものなり。詩人小説家となつて、まづ其の動機に同感し、さて後徐ろに教化開導の法を立てよ、これ慈眼者の爲すべき所爲也、淺薄なる文明風を揮り廻す勿れ。

○ 詩人小説家の最も偉なる點は、其の神の如き心を持して一切衆生に普遍平等の光明慈悲の露をそゞぐにあり。近松や沙翁に服する所は實にこゝにあり。其の描寫せる天地の中には道德以上の道德あり、殊に孤弱不具病者等に對する深き同情は、實にそのものゝみにて既に高調の詩也。

○ 原壤夷俟子曰、幼而不孫弟、長而無述焉、老而不死、是爲賊以杖叩其脛。孔子の如何に自然の人情を重んじて、老子一流の任誕自ら禮法の外に放し、いまゝなるものを惡めるの甚しかりしかを見るべし。其の奮然として偽善を打ち懲らす態度、頗る耶穌のエルサレム教會にて爲し、所と似たり。孔子と耶穌とは自然の人情常識を重んじたる點殊に相似たり、老釋とは一段の異あり。

○ 吾人は釋迦、耶穌、孔子の言行を讀みて、其の差異よりも同一點の多さに打たるゝなり。從來の倫理說殊に進化論派倫理家の如きは、東西古今の道德の差別相の一側を見るに

偏して、其の同揆の二側の更らに驚くべきものあるを逸したり。直覺派の倫理説には、抹すべからざる一種の眞理あるなり、如何ほどまで道德の根本思想は東西古今相合すべし。さぞといふ事は、精密に研究すべき倫理學上の問題なるべし。

○

『三聖之教』といふ一著を生涯中に物したき心勃如として起れり。願はくは一時の浮心にあらずして其の功を竣ふるの日あらむとを、神よ助け給へ。あゝ偉なるかな三聖。不覺涙下る。

(六月八日)

○

自己人格の修養、其道たゞ徳教の事のみならんや。古名

家の書畫を披展し、詩歌文章其他日用の骨董品なども皆攝して以て氣を養ひ心を琢くの資となるべし、趣味的教育是れなり。一種のアナロジイ若しくはシムボリゼーションを以て、古人は天地山川の自然界より道德の根本思想に培へり。相撲を見てもこゝに修養の資あり、純乎美を美として味ふはインシビッドなり、吾人の徳性にて、之れに一種の道德的性質のアナロジイを見、シムボルを見て、一面深き満足之感あるが美意識の實狀にあらざるか。 (全日)

○

美に恍惚して無我となる結果が、吾人の染情を洗淨して一點の私心を着けしめざる刹那の意識に美が徳育に及ぼす主効果なりと、從來の學者は見たり。されど事實はむしろ

月の清淨無私、太陽の勇士的態度 (ウシヤス)



の曉の女神  
を道ふ  
ど、智者の  
水仁者の山

ろ一種の比較感によりて吾人の徳性の影を美象中に認め  
て、一種の満足を感じるとに美の主感化はあらざるか、考究  
問題也。  
(全日)

迷信の  
フオイエ  
ハ

もし科學者のいふが如く、現象のみの考究が眞理を得る  
唯一の方案にして、一步現象以外に出て、「不可知」を云々す  
るは迷信なりとせば、哲學者が實在を理性もしくは意志な  
どとして寫象する事も、畢竟迷信ならざるを得ざる也。科  
學者の眼より見れば、單に宗教が迷信なるのみならず、哲學  
其者も迷信たるなり、殊にヅントの如く、哲學は科學的要求  
と同時に、吾人の心情、全體の要求をも満足せしめざるべ  
からずと解すれば、哲學は殆んど宗教と姉妹觀をなして、同じ

く科學より腹ちがひの子として排斥せらるべきが自然な  
り。

○

直覺論

所謂幸福なるもの、何なるかは人々の所見一ならざれ  
ども、一切衆生をして幸福なる状態にあらしむるとが人生  
の至上目的なる一事は、つひに争ふべからざるに似たり、而  
してこは究竟人類理性の直覺的認識なり、第一原理也、これ  
釋迦、耶穌、孔子の意識の最大最深の事實なりし也。予はこ  
ゝに幸福なる状態、ツースタンドといへり、状態は平靜定住  
を意味す、活動を生命とする道德以上の一境を意味す。道  
徳の目的は道德以上のものなり、幸福の状態其事は道德態  
にあらざして、むしろ美的對象と見るべきものなり、されど

道德の究竟目的を叩けば、つひにこの一境以外にある能はず。

迷信論の  
一部  
知識と實在

感情の要求其事が同時に實在の内容を展開しつゝあるにて、之れを斥けて主觀的空想となすは誤れり。理論的  
求のみが實在の内容をなすにあらず、情意的要求も亦實在  
内容の一面を形るものとして、併立の位地と權威とを有す  
るなり。情意の要求を、理路の靡ろなるもの、随つて理論の  
燭照を須つて消滅すべしと思ふ一派學者の見は大に謬れ  
り。宗教的真理の對象たる神の如きものは、よし客觀的自  
然界に其の存在を認め難しとするも、その故をもて神を無  
と斷ずるは俗見なり。宗教的意識を寓として、我等が根本

の要求を満足せしめつゝある神の實在をば、世の一派の學  
者は何とか見るらむ意識上の實在は實在にあらずとは何  
を根據としての斷定ぞ。神は山川草木の中に明かに現れ  
ずとも、宗教上の實驗的意識の中に儼として存在す、而して  
人またこの存在權を否むもの勿るべし。畢竟ずるに、吾人  
の意識裡に發展しつゝある神が同時に實在其者の發展也、  
之れを外にして神はいづこに自己を顯現すべきぞ。神を  
超自然、超現象の境にのみ局せしむるカント一流の見解は、  
予の與みせざる所勿論現象即實在といふものから、實在即  
ち神には未だ現象として吾人の經驗的意識に現せざる部  
分あり、未だ吾人の意識上に發展を了せざる未顯現の神祕  
境あり。この未開展、即ち不可知の神に吾人が神祕なる感

情を走するとあるも自然の要求なれども、而も其は吾人が現實の意識にて攫みたる、即ち寫象し出だしたる神と別のものにあらずして、むしろ其れと相聯なりて一體をなすべきもの、即ち我等が既知の部分神の他の一側を補ふべき未知の部分神也、吾人の宗教的要求は、其不可測なる深奥の立法的創造力をもて、其の未知神の一部を次第に吾人の意識裡に顯現しつゝある也。されば宗教的意識の造る所のもの、同時に客觀的實在の發展なり、かくして一面に未知の神祕境をも合せて既知の意識裡の神と一體をなせる全體の實在を崇拜の對象となしつゝあるが、吾人宗教的意識の實狀也。耶穌や、馬鳴や、パウロや、ド、アッシンなどの天才によりて知り得られたる神は、或は尙ほ吾人の意識裡に發展する

の餘地を有すべし。神は知られたると共に知られざる神祕あり、而してこの一切を一實在として渴仰の對象とし、而して之れを表象するに、限りある既知の神の符號を以てするが故に、所謂神の觀念なるものが、他の意義全體の發達と共に不斷に墮して迷信とならんとする傾きを有すると共に、そはまた實に神の發展の必須の形式なるが故に、どこまでも發達進歩して已まざる生命を有する也。而してかく生命ある符號に盛られて發達しゆく神こそ、實に實在自己の顯現にして、この神を離れて即ち吾人の意識裡に現象化し、個化しつゝ發展する神を離れて、また神なるものあるなきなり。

一切衆生をして幸福ならしむるといふとは倫理上の最高目的なるべし。もし幸福といふ意義を抽象して形式的に考ふれば吾人はこの一原理以上に倫理上の最高原理を摺む能はざる也、三聖の理想また實にこれ以上に出てざる也。この點よりいへば功利説の如きも實に高大なる倫理主義なりといはざるべからず、ミルが功利説は一面人性に過大の要求を課する餘りに高上なる標準なりとの世評を受くといひしも宜也。萬人最大數の最大幸福を圖る功利説の精神は實に偉大なるものといはざるべからず、唯其の幸福の意義が快樂的なる點に於て、功利説は救ふべからざる短を有するなり。幸福の一語は廣汎にして便利なるだけに其の意義さま／＼なるが故に、其の意義を明かにせざ

\*ア氏は二者を離れ善し  
 ストア風は善  
 意もしくは善  
 徳もしくは善  
 イモニアの  
 主要部を偶  
 然事とす

れば倫理上明確なる主義を立したりとはいふべからず、之れをアリストテレス風、ストア風に解すべきか、或は功利學者風に快樂即幸福と解すべきか、或はギリソンの如くに自己性能の圓現をもて幸福と解すべきか、或はカーライルなどの如くに「祝福」の義をもて幸福の語に代ふべきか。予はおもふ、快樂をのみ目的とするは事實にも叶はねば、吾人の理想にもあらねども、何等かの快き感情態の伴ふにあらざれば吾人は到底行爲する能はざるべし、即ち自家満足、の感に伴ふ、快感是れなり。徳を行ふものは徳を行ふ満足、の快感あり、外來の利益快樂は吾等の希ふ處にあらず、また希うても得らるべきか否かは、神學上の假定を除きては必しがたき偶然事なるが故に別として、徳其者に伴ふ内在の

幸福感、また本具の報償 (intrinsic reward) は徳其者と不離のものにして、こは吾人の目的の一部たるを妨げざる也。吾人は徳其者を目的としてこの快感を目的とすべきにあらぬは至當なれども、もし全くかゝる快感なしとすれば如何、内在の幸福だになしとせば如何、吾人は尙よく仁義道德を行ふの人たるを得べしや。こは吾人の意識の事實と乖く也、少くともこの幸福は吾人の efficient cause 即ち動機として吾人を動かしたるある也。他の一面に、客觀の事物其者に衝動しゆくファイナル、コースあるを許し、而してこを客觀的動機とし、前者を主觀的動機として吾人が正善を行ふ場合の正當なる動機をこの二者併行にありとするは必しも妨げざる也。スピノーザが「快樂はよりて以て靈魂が高上

なる完成に進むもの」といひし言も、之れを主觀的動機の義と解すれば可也、又彼れが、されど吾人本來の衝動の目的は、快樂にあらずして心の完成實現にありとやうにいへるは、件の客觀的動機ファイナル、コースと解すべきもの也。この意味にての快樂は、カントの快樂とは異なる。……

理想は一面に普遍的なると共に、他面に具象的なるべきものなるが故に、吾人が理想とする神も一面普遍性を具へながら、一面に無限に具象的なるべきなり。人心の發達と共に自己の全人を以て寫象する神は、言ふまでもなく吾人の全人を満足せしむべき神ならざるべからず、少くとも個人々々が其の機根相應に認めて以て自己の全理想を圓現

せる實在者と見ざるべからず。佛教にいふ眞如、婆羅門の梵特にアトマンの如き知的抽象的直觀の對象は、唯吾人の知的方面の無限の要求を満足せしめ得べきも、他の情意の一面を有するものとしての、吾人全人の要求を満足せしめむには餘りに冷素なり、乾枯也。佛教の如き、スピノーザの如きは、其の世界觀、人世觀に於て、人の感情を煩惱視する見地を取り、唯吾人の知的活動のみが、即ち知見を開きて物の普遍平等の側、永恆一如の側を靜かに觀照して差別見の妄情に羈せられざる状態のみが、吾人の本性を完うする唯一の眞諦なりと觀じたるなれば、神の唯知的寫象も已むを得ざれど、我等近代の情意の獨立の位地を明かにし得たるものにはありては、如是寫象を以て満足する能はざるなり。

吾人は佛教の眞如、婆羅門のアトマンよりも、眞善美の神に戀の渴仰をさしげたるプラトーンを偲び、更に愛の本源を加へてアバ父と叫びたる耶穌に心一層惹かるゝは、畢竟其の神の一層富贍に、具象的にして、我等の全人の要求を満足せしむるに近きを見れば也。然れども神の全相は客觀的には吾等に知り得らるべきにあらず、萬有に發展し、吾人の意識に發展したる個化、現象化の神を知り得たるのみにして、これ以上其の全き姿は依然として不可知也。吾人は一分の神を知りて全分の神を知らず、一個の全としての神は尙ほ依然として吾人の知識以外にあり、永恆實に然るべし、吾人は一分の神といひ全分の神といふ、何となれば吾人が意識に寫象しただせる神なるものは、畢竟神其者、實在其

所謂天啓の味即ちこの實在の發展を認めしむるを得べし

者の内在的發展に外ならずして、これ以外に神の實在なるものあらざる也。神を全然現象以上の超越界に局せしめて差別界と峻別し没交渉とするカント一流、不可知論者一流の見解は吾人の取らざる所也。神は現象界以上の不可知の實躰界に超在するものにあらずして、現象界其者、吾人の意識的事實其者が神の内在的發展の一部たるものなり。是故に、吾人が宗教的意識の要求に觸れたるは、同時に神の實在に觸れたるなり、宗教的意識の深奥なる要求が取りも直さず實在者の内容の本質をなすもの也。唯だ然り、然るが故に吾人は一部の神に觸れ得て全部の神のちもかけを偲ぶを得るのみ、我等が全人の理想を傾寫して描き出だせる神も、畢竟神の一分相にして其の全相にはあらずるなり。

吾等の理想の中に實現せる神が吾等の唯一の神にして、而も其は到底全分の神にはあらずして一部の神なり。ブライトンや耶穌の神も尚ほ吾人の意識海に浮べる一滴の神にして、神全體とはいふべからざるものなるべし、されどこれ何ぞ病まんや、如是は我等有限者の已むを得ざる先天の約束なり。神は我等の理想として無限に發達すべきものにして、而も全實現の期あるべからず、而もものが有限の理想、有限の機根をもて、人さまざまに描き出だせる一分相の神は、やがて全分神の縮寫なるが故に、其の高き卑さの度を變れ、ひとしく神の生命に觸れたるものなり。吾人が理想を介して、見る一分神を離れて神なるものあるべからず、理想以外の神即ち吾人の寫象以上の神は、哲學上所謂限定

の概念としては見らるべし、されどこれは宗教上の神にあらず、全分の神、不可知の神は吾人と活交渉を生ずるとなき無にひとしきもの也。神としいへば必ずや吾人の全人の理想を通して見たる神ならざるべからず、これは一分の神なるべし、されどこれ吾等の有限性の約束にして病むに足らず、一分神に觸れたるものはやがて全分神に觸れたるもの也、神と人との交渉點は唯この一點にあり、全分を一分(理想の神)の中に觀ず、然りかくする以外に吾人は神を觀ずる道無き也。而も一分と全分とは、カント一流の如き現象と實體との無交渉の關係にあらずして相即無礙の關係なるが故に、吾人は一分の神を觀て、尙ほ天地の實在に觸れたる深奥無限の満足の意識を有する也。わが機根わが理想の全を

つくして神を見よ、かくして見たるものこれ實に眞の神を見たるもの也。吾人が理想といふ具象の姿に盛りて視る神、やがて實在の内在的發展なるが故に、理想の神即主觀的幻影の迷信と排したるフォイエルバッハの見によりて少しも撼かされず。(フォイエルバッハの有趣味の見解は尙ほ論ずべきものあれど、こゝには餘地なし。)(六月廿七日)

\*人を全く離れたる神、現象を全く離れたる實在は、如何にして吾人と交渉し得べきぞ、如此は印度の或宗教ブローチノスの宗教なり、こは厭世に流るゝ傾きある宗教也。吾人は眞の人たらんが爲に神を要し、神は眞の人たるが故に吾人と交渉す、理想としての神、これ神人の交渉點也。神は吾人の理想として自家を發展しつ



あるなり、理想以上言説を絶し、名字の相、心縁の相を絶したる神は吾等に取りて何の要がある。謂ふこと勿れ、理想としての神は有象の神なるが故に眞の神にあらずと、吾人が理想として描ける意識的實驗の神これ取りも直さず神の内在的發展にあらずや。内在的發展の神を離れて神を求むるは、つまり神を差別と絶縁せる平等實躰の境に求むる抽象的思辯家の妄想のみ。

迷信論用

○ 印度アールア民族が一切萬有の主として人格的に寫象せるブラヂァーバチが、後にブラーマ即ちアートマン(精神)として純知的に寫象せらるゝに至れる經行を、人或は之れ

を進歩となせど、こは寧ろ前に宗教的に見たる神を哲學的に見るに至れるにて、一を迷信として他を合理とは斷ずべからず、前者はちのづから前者の獨立の位地を有するものなり(勿論人格觀に纏綿せる迷信は排すべきものなれど)。

○ 倫理學の性質に對するパウルゼンの見解。moral factは、全く自然現象なるか。moral factの中に含まれたる判斷理想の意義如何。

○ ノルマル、ステートとは、つまり倫理正善の標準より是と斷じたるものにあらずや、自然の状態とはこの點に於て異なる、生理的解剖的正常態とは意義甚しく異なる。

○過去の理想、過去の正邪の標準は、志かくとなり、其の普通相は志かなりといふと、之れを我が理想とすべしといふとは勿論別事なり。この意味よりすれば倫理學はどこまでも自然科学的方法を取りて、歸納、分類、説明を事として可なるに似たり、されどかくして發見したる過去の理想と吾等が新に立つべき理想との關係は如何。理想は天才の立する所、科學の與ふる所にあらずといひ得べきも、而もかゝる科學的研究の結果として得たる理想の影響を受けずしては我等の理想は成りたらずとせば、而して我等の新理想は畢竟過去の理想の成ぜんとして未だ成ぜざりし形式的一側を補填するものとせば、過去の理想はやがて我等が立

すべき新理想の根柢的原理たる也。この意味よりいへば、倫理學上歸納し出だす法則は、自然法に對して須らく則るべきもの、基礎を給するもの也。

○  
何故に佛教、耶穌教、回教、波斯教の如き開祖、祖師の歴史的  
人格を有する宗教が、今日世界を支配する最勢力ある宗教  
として其の生命を有するか、これ畢竟釋迦、耶穌、モハメッド、  
ツァラツストラ等偉人格の、吾人が神に對する理想を具象  
し結象せしむるに最も便にして、吾人はこれら偉人格の中  
に最も明かに具象的に神の姿を志のぶとを得るが故なら  
ずや。言ふ迄もなく、多くの人が耶穌、佛陀等を崇拜するは  
歴史的の人格以上の理想化、いはゞ神化ダイアンしたる耶穌、佛陀を

崇拜しつゝある也。ポロが耶穌を靈的、型的のものとして天上界に引上げたる、馬鳴が釋迦を法身佛としたる、一面よりいはず、これ人を神としたるものにして、他面よりいへば神を人とするの要求より出てたるもの也。抽象的不可説の神は吾人と交渉のよすがなく、さりとて歴史上の開祖其者は、崇拜の對象としては吾人の要求を充たすに足らず、こゝに於てか、之れを理想化して神位に上し、即ち人的神として之れに渴仰の崇拜をさへげたる也。吾人の神は要するに理想としての神なり、而して吾人の理想は釋迦、耶穌等の偉人の人格に最も明瞭に現じたるが故に、吾人は此等の人格を理想化して(無意識に)之れを神として崇拜するなり。名は佛陀、基督といふも、彼等の崇拜せる對象は直ちに神なり。

り、理想としての神也、この意味よりすれば、世の佛陀に向つて合誦し、耶穌を信仰するものを強ちに迷信と排すべからず。

吾人は人としての神を要求す。人的ならざる神は要なし、これ慈悲、光明、攝護、仁愛等の無限の理想的屬性を有したる人的神を要求する所以、これ人類最深の要求也。この要求に應ぜざる宗教が、一として榮えし例なき歴史上の事實は、其の根柢に不拔不變の普通の根據を有する證ならずや。

○

萬有神教觀は吾人の宗教的要求を満足せしめ得べきや。思ふに、我は神なり一切神なりとの思想は、嚴にいへば神自

身の有し得べき思想にして、吾人人間の現實の意識、現實の要求は此かる思想を有し得んには餘りに二元的なり、差別的なり。即ち吾人は何處までも有限なる人間としての自家意識を有せざるを得ざるべくして、而してこれに要するものは神人の交渉也、我と神との感應道交也、吾人の宗教的意識の最も切に要求するものはこの二元的交渉也。此の二元的道交が、吾人の無限の生命也、宗教の中心なり、これ無限に理想を追ふ人間の本性より來る必至の要求にして、これを外にして我等は宗教の言ひつくしがたき深意を味ふ能はざるなり。或意味よりいへば、我等は神其者となるよりも、むしろ神と無限に感應道交する關係、經行に甚深の満足を得るものなり、一たび我は神なりとの意識に達せんか。

これ吾人は宗教を要せざる人間以上の神となりたるもの、然らずは自大浮誇の空言大語のみ(ソフアイの如きこれ)。我れはこの意味よりして一切を神とする萬有神教觀を排す、されど萬有神教觀は平等的方面よりして吾人の神人二元觀の根柢を結ぶものなれば、吾人の理論的要求は之れを排すると能はざる也。一面よりいへば一切衆生草木國土は皆一如の莊嚴海の一原素にして、我等の現身其まゝが金色の妙光を放ち、無量法音の神躰たるなり、觀じ來れば煩惱即菩提、衆生即佛陀、我即神也、知的觀照の態度よりいへば、如是觀は實に融會無碍、一如相即の深理を道破し得て達人大觀の趣あれど、そは實際の要求に切ならず。

耶穌の天人父子の意識とても、多少の迷信の混ぜざるなさはあらざりしなるべし。或は餘りに其の神との近き親しき關係其者が、一種の感覺的人視觀を有せしやうにも見ゆるふしあればなり。時には理性の統整を脱して、情熱の旺する所、一種のモノマニア的の迷信ありしを見る、其の非常なる或物を意識に有せし故をもて、全く迷信なかりきとは斷じがたし、吾人は其の大生命に觸れ得て現實其者の如き意識を多とするもの。

○  
汎神觀は、一端には人をして我即神といふ自大意識に昂上せしめ、他端には我即瓦礫もしくは我即一波といふ自卑の意識に低降せしむ。或はヘーゲルぶりに天地の進化を

説きて平等一如觀を救ひ得るに似たるものも、實在即合理と觀じて吾人の二元的意識を閉却す。汎神觀は所詮人對神の吾人の倫理的意識、現實我の理想我(神)に對する精進交渉の意識を説く能はざる弊あり。

汎神教は、ハルトマンの所謂理想、理想的、解脱の宗教として見るべきもの、其は必然に虛無觀を一面に伴ふは、我乃至萬有は本質上神なりと觀ずる側には、神ならざる現實の差別相は虛無もしくは否定もしくは一波に不過と觀ず、故に汎神觀は人の倫理的實踐的宗教意識に切ならず。人生は理觀の上よりしてのみは實悟し得べからず、少くとも凡俗の二元的意識に切ならず。(スピノーザ倫理、ストア倫理の變轉參照。)

○ 天地の生命はひとり基督教にのみ顯るゝにあらず、佛教のみに現るゝにあらず、一切の宗教的意識皆その〴〵其特長の意義を有す。吾人はすべての宗教的意識を併せてエマソンEmersonの言の如く一意識の版圖に編入すべく、かくしてよく神の無限生命に觸れ得べきなり。禪、儒、新プラトーン等皆一種吾人の學ぶべき生命を有するなり。異端外道の中に却て神を識れると多きものあり、無神論者として禪訶せられたるスピノーザは、當時のオーソドックスが解するに餘りに深き宗教的意識を蓄へたり、げにノバリスの言の如く、彼れは神に酔へる人なり。無神論、無我觀の釋迦は、今日の一派の基督教家よりも神を一層深く味へるやも知れ

孔子、プラトーン、マールクス、ウレリウス、エビクテ、トス

ず。

○ 宗教的意識は由來神祕的、詩的なり、之れを語るものゝ語が詩的となり、幽微なる調子となるは自然の數なり、耶穌、釋迦、其他高僧の語皆然り。今日の宗教家が滔々として明瞭に演説し去るもの、果して何物をか攫める、彼等の言葉に微韻幽趣なし、詩的高調なし、神祕なる韻ひなし。今日の雄辯宏辭の演説家よりは、芭蕉や西行の方が天地の意味を多く知り居るやう思はる。

○ 理論家、學者としての要求を發瀉すれば、人彼れは學者にして宗教家にあらずといひ、グイス、グーサ、譏らるゝものま

た實にこの惡聲を怖るゝに似たり。何ぞ偉なる學者たると同時に、偉なる宗教家たらざる。二面を併すが何故に非なるか、吾人は一面に無限に理性の要求を容れて知識的に向上すると共に、他面に感情の深要求に耳傾けて切實なる宗教的意識を見んとを理想とす。

○

古名人は自ら造れる美術品の前に不覺跪拜し渴仰す。

詩人美術家の躍如たる美に對するや、無意識にして其の深實在を志のびて涙出づるを禁ずる能はざらんとす。其の美意識や、極して實在を觀ずる宗教的意識となれる也。

古人の、一刀に三禮し九拜するは單に誠意のみならず、其の刻み出だす一線一皴が躍如神行權威を以て迫り

來り、不覺肅然襟を正したる也。

○

我が理想として渴仰し出だせる神が、同時に權威を以て我れに對し來る、其權威は世界の根柢より來る深さを有する也。我が理想の點に過ぎざる神が如何にしてかゝる權威を有するぞ、これ吾人が我が理想を超自然物と結ばばなり、我が理想としての神即ち實在との信仰を有すれば也、如是理想其者が神の内在的發展なれば也。神は抽象的超絶者にあらず、我等が理想其者としてこの現象界に自家を開展しつゝあるなり。理想即神なり、實在の内容を成すもの也。

○

もしハルトマンの思想を應用していはゞ、汎神教觀は解脫宗教なり、即ち感情の解脫といふことが其の特相なり。我と神と本質に於て一如同躰なるを感じて、こゝに大安立するは其の特長なり。されど宗教のことは唯これにて終るにあらざ、感情上の解脫は未だ必ずしも實行上の解脫ならず、感情上に解脫して其の祝福の境に酔ふも、現實の境に歸れば依然としてそこに苦闘あり、煩悶あり、涙あり、苦痛あり。されば一步を進めて、この感情上の解脫を日常實踐の境に實現して、其ははじめに完全相を有すべく、此くして苦闘を経て經驗上神と合いつゝ、進みゆく實意識を得て眞の解脫に入り、眞の神生活に入りて堅實なる安立を得るなり、これ即ちハルトマンの所謂意志の聖化、Heiligungの境なり。

り。解脫を其れのみにて目的として其の安慰の感情に酔ふは、吾人の宗教的生活の究極の目的ならず、これを一轉化せしめて實際の解脫即ち聖化の境に進まざるべからず、而してこゝは特に理想の神に向つて精進しゆく活動を重しとする二元的一神教の長なり。前者は詩的、哲學的宗教にして後者は倫理的なり、前者は後者の豫備門なりとも見るを得。

○ 活動といはずして「恩寵」といひ、神人の關係といはずして感應もしくは道交といふ。如是は實に宗教的意識及眞理の發表として、他の理論的抽象的眞理の發表と區別せらるる特殊の點なり、宗教的眞理の本來の性質は、實に此の如く



人格的のものなり。

○ 或はまたフ・イエルバツハ一流の論ずる如く、吾人の理想として描く神は、これ吾人の理想を客観化せるもの、意欲の投影に外ならざるが故に、其は所詮主観の迷妄に過ぎずといはむか、此論げに一理あり、かくしてフ・氏一派が神學はつまり人類學に外ならずと觀じ去りし一種の主張に對して、吾人は尠からざる同情を寄するものなり。吾人人類の欲望、需用、要求を離れて神なるものありやといはゞ、吾人は無しと斷言するに躊躇せず、吾人の意欲即神也、吾人の意欲を離れて神は考ふ可らず。されど如是見何ぞ累とするに足らんや、吾人の宗教的意識には尙不可拔の特殊態あれ

ばなり、何ぞや、吾人が意欲もしくは理想の賦采をもて渴仰しいだせる神が、同時に無限の客観性、無限の權威を帯びて吾人に蒞み來ることこれなり、主観の投影を見らるゝ神が實在の姿にて吾人を打ち來る、この一種の意識は何物ぞ。神の本質は主観の意欲を客観にうつして造り出だせるものなりといふ主張に許すとすも、此くして造り出だせる神が、世界大の權威を以て吾人に蒞み來るは何故ぞ、吾人はおもへらく、これ實在(神)が吾等の意識に内在的に發展すればなり。吾人は漫に純理哲學の境に飛躍するものにあらずといへども、今は唯だ此くいふの外に道なきを感ずるのみ、吾等の意識裡に發展する神(及萬有に發展する神)を離れて、神の本質少くとも其の本質の一部が解せらるべしや。

\*吾人は差別界、現象界と峻別せるカント及不可知論者一流の超絶的平等神を神とするの抽象と枯瘦とに堪ふる能はず、抽象一元觀は神を解するの道にあらず。これと同時に吾人は世界其者を神とする凡神教の立脚地を卑しとす、神は内在すると共に又超在す。されども……。

\*主觀的にいへば神は吾人の欲望の投影なり、されど客觀的にいへば吾人の欲望其者が神の内在的發展也。

吾人の欲望もて描ける神、やがて吾人の意識裡に發展せる神の一片也。欲望の神、同時に實在の神也。この見地に立つて吾人の一種特有の宗教的意識 (unique consciousness) は始めて正解を得べしと信ず。されば欲望を以て描く神直に主觀の妄想にあらず、迷信にあらず、

弊は唯だ其の神の内容をなす吾人の欲望其者の狹隘、卑劣、不道德的、乃至は他の一代の理論的世界觀と矛盾し紛れがちにあり。迷信の源は實にこゝにある也、驟雨や太陽の如き慈惠の對象としたる未開人の神も、今日の進歩せる欲望の高尙となれる宗教的意識より見て迷信の神たるなり、當時にありては合理的の神たりし也。吾人が道德的欲望もしくは理想を投影して造れる神も、實は尙ほ進歩の階段中の事にて、之れを絶對的に合理なりとするは増上慢に過ぎず、宗教的信仰には絶對的迷信、絶對的合理なるものあらず、いづれも發達の一波一浪に乗りて無限の境にあくがる、同じ衆生ならずや。漫に蠻人や異教徒の神を迷信視する勿

れ、宗教の境にありては機根の大小と欲望の高下とをいふべし、迷信は機根の小、欲望の低きより來る、機根をれくくの神、欲望もて描くそれくくの神其の者に迷信あらんや。吾人は吾人の欲望といふ寫象に投入せざる神なるものあるを想像する能はず、病む所は唯低劣なる欲望もて描く神にあり、吾人今日の神も亦吾人の欲望もて描ける神也、唯その道德性の富贍なる點に於て迷信ならざるなり。欲望の寫象といふ根柢の觀神法其者に迷信あらんや、これを迷信視するものは宗教といふ吾人の特殊の意識態に盲なる、宗教心なきもの空論也。

○ 或はいふ、神は單に理想の替名なりと。されど單なる理想は吾人の神ならず、苟くも神といふ以上は恩寵の神、感應の神ならざるべからず、感應なくして宗教はあらず。もし神は理想に外ならずといふも、吾人もしこの理想と感應し道交し得なば、これ事實上理想は人格的生命を有する神たるなり。生命と生命との接觸を離れて神はあらず、理想にもしかゝる感應力ありて、惠然として人に蒞まばこれ既に神たる也、單なる理想を以て見るべからず、然るも尙神は單に理想なりといふものあらば、これ強ひて言葉に拘泥したるもののみ。

○

教は、印度に釋迦の出てし時、一方に婆羅門の高尙あり、他方に順世學派の快樂主義ありて、眞の生命ある倫理的宗教なかりしに髣髴す、古京六宗の學問教にして、俗間には快樂的宗教行はれたりしに似たり。

○

快樂と幸福

幸福、ささくあると、は萬人の欲する所、バスカル曰く、縊るもの尙ほ幸福を求めて縊ると、されど之れを英語のハッピーネスと同視する場合は異なる、ハッピーネスは快樂也、プレヂチヤルサイコンス快意識態也。スペンサーは、萬物皆時空の直觀によるが如く、萬行皆快樂といふ直觀によるといひたれど、こは事實を穿たず、さればスピノーザは *Beatitude* といひ、カールは *Blessedness* といひ、ダリオンは自己實現といひて快樂といはず、ミ

ルさへ自重の一念を重しとして幸福の高上なるものを人生の目的としぬ。幸福を快樂の義とすれば如是人其見を異にすれど、快樂以上漠然唯ささくある状態とすれば……。

○

平生の思量情識一切行はれずして、物あり當頭に來つて小我を千碎萬破して、放焉千古一貫の實相に我を載せて心不動、不執、不染、不着、萬境と推移し、萬事と酬酢して跡なき神化の境、これ禪の理想、また基督の、汝曹のうち誰れか思ひ煩ひて其生命を寸陰ものべ得んやといへると符す。宗教とは我を大我に載せて迷はず動ぜず、我に無限の活機生命を充たして、超我の眼識洞然として一切の差別に應ずるにあり、八方睨み也、無我なり、無執着也、神と共に萬有を撫育する

の意識也。

That overpowering reality which confutes our tricks and talents,  
and constrains every one to pass for what he is.....

無限のデヴォーション、リシグデーション。貴いかな「神  
我を殺すとも我れは汝に頼りたのまん」のデヴォの語。  
マホメットのイズラム(無限服従)サブライム、アブテケ  
ーション。○歸依の意義。人は究竟無限の歸依の外、  
如何ともすべからざるものならずや。○大必然は大  
自由となる。○「我を離れて天に任せよ」と黒住はいふ。  
宗教は死によりて生を學ぶの術。○英雄崇拜論五一  
頁參照。コリント前書七、二九以下、パウエルゼン一〇七  
頁、エビクテトスの語參照。

○  
直觀 intuition とは、知の分析的歸納を須たずして情もて  
直下に綜合せる知的形式也、情の綜合力也、物の暗示により  
て一躍して其の心核をつかむ力也、プラトーン風にいへば、  
直觀は經驗の多少の外縁に觸れて疇昔の理想の憶起也。  
ゲーテが建築を音樂の凍結したるものといひし如き、情の  
洞觀の好一例也、直觀也。

(八月十九日)

○  
物のタイプ理想は、物の數、特質の和也。プラトーンの所  
謂種族的理想は、其の形而上的實在の一義を撥無して見れ  
ば、吾人の所謂物の本具する型タイプに當するものにして  
決して排すべきものにあらず、こは經驗上許すべきもの也。

虎には虎としての型即ち種族的理想あり、馬牛犬皆然り。而して美術家はこの型を自家の意識に温め、培ひ、發展せしめて之れを客觀化す、こゝにはじめて虎は虎の生意横生し來る。ミリアタイプは影の如く抽象的也、されどこの抽象的のものが美術家の意識裏に發展して面目を新にして出て來る也。まづ抽象して而して具象化す、於是そは實の虎そのものをして顔色なからしむる虎となり、馬となり、犬となる、これを稱して理想といひ極致といふ。ラスキンの極理 ideal もこの意識也、つまり物の極致は意識の發展に須つもの。

(全目)

スピノーザ論のはじめ

スピノーザは所謂 *Schöne seelen* の一人なり。エマールン

シ、トローロ、ラスキン、モリスなど皆一派の一物なるべし、ゲ  
イテの所謂「天才は静處に自己を造る」(*Es bildet ein Talent sich in der stille*)なるもの、瞑想生活のうちに新天地を創創せ  
しもの——スピノーザの宗教寛容主義——ロック、レンッ  
シグ——個人主義、中世紀の教會、國家權威主義に對する反  
動として、デカルト——知識生活の價值如何。——プラト  
ン、アリストートル——平民を重んぜよ。——カルチュア、文  
明のみを過重する勿れ。——貴族主義を排す。——パウルゼ  
ン二〇〇頁參照。

汎神教論

路加傳十八章從九至十五、耶穌の譬喩は深意義あり。汎  
神教主義は、やゝもすれば人をして神前に自ら是として自

雜記(其四)

足自矜せんとす、すべて理性主義を奉ずる人の失敗——希臘人の經驗——自己の罪に泣くものにしてはじめて他を憫む心あり、かくして人生は涙の谷の中に相結びて神の愛を味ひ、相助け相和して行くべし、自を是とするものは他に對する深刻の涙なし同情なし。自足者は個人主義となる、快樂主義となる、無理想主義となる、古人の熱情の宗教的團體は皆自己罪惡の意識より來れり。

○ 人生の至上目的に關する倫理學上の二見解——ヴントとグリーン——前者は Historicism にして social will を至高の實在として個人を第二のもの、インシグニフィカント、ファクトルとし、後者は個人の社會的意義を認むるも、社會の

人格性を否定して個人の自我實現を理想とせり。——最高の綜合は大我の意識にあり、個人我と社會我との合躰、前者の理想境は美術家的自由活動にて、後者のは文物制度の圓滿の發達也。——二者の調和相——スペンサーの理想社會と理想人——ヴントとショーペンハウエル、佛教の凡神説。

## 友道論

○ 友道に最も忌むものは猜忌也、嫉妬也。友なるものは多くは自己と主義、理想、好尚、信仰を同じうするもの、而して其の知識、才能に於ても甚しき懸隔なきを常とす。げに友は第二の我也、隨つて起り易きものは嫉妬也、而も一たび嫉妬の情生ぜんか、最早貴き友情を味ふの資格なきものと墮せる也。——友情と超我——我を最もよく知るものは神にし

て次は友也、友は第二の神也。我等は一切の自家秘密を打明け得るものを得て始めて解脱す、超我す、人は知音の爲めには身命をも献げて辭せざらんとするもの、而して如是知音は神と友とあるのみ。管仲、鮑叔の例、以て徴すべし。——故に自己の弱點秘密を打明け得ざるものは眞友を得る能はず、眞我を打出し肺肝を披瀝して、相照らすものにあらざれば友ある能はず、友を得る第一要件は公明に我を打明け得る勇氣也、況んや神を得るに於てをや。基督がゲッセマテに於いて無限の苦痛を打明けたる熱禱もしくはわが神わが神と叫びたる聲を聽きて、吾人は彼れが神との神交道應の深さを知る。胸を打つて痛歎せず、毫も自己の小弱罪業の意識に泣かずして神と交らんとするは難いかな、世には

高く自ら是としてさて神と交り神に祈らんとするものあり、これ自ら十重二十重の墻壁を身邊に結び廻らして神と相見むとするが如く、却々に神と遠かり隔つるものといふべき也。友に交るまた如是、自ら缺陷弱處を掩ひつゝ、み、恰も栗のイガの如くひしと護身の戟劍に身づくろひして、さて友と交るものあり、此くの如くして友を得んと難いかな。——されど自家短處を曝露するは友に交る一要件なりといへども、こは他の最要件と相須ちての自然の果たるを要す、眞善美の理想に向上せむとする熱情に相合し、此美しき心意氣に肝胆相許して自他提撕して精進する一事、是也。この高上なる結合ありて、はじめて自他その弱點短處を打明け合うて、而も相同情し相切磋して進むが故に、其の醜處



暗處の疵は高上なる理想の光もて和げられ、言ひがたき向上の歎きの涙をもて温めらる。此かる友道に於ては、自他その短處弱處を知るとが、却つて同情發憤の動力となる。——  
アリストートルの三友論——。

○ 實利主義の時代、今の人は何事をなすにも資本を卸すが如き心得にてなす也。其求むるもの利殖也、繁榮也、厚生利用也、武士道の要求は之が反動也。武士道の根本缺點は人を人として扱ふ人格尊敬の念なきこれ也。

友道論  
白首相知猶

○ 今の世には何ぞ熱情をもて友を求むるもの、少き、若草の妻を戀ふるとひとしき真情をもて、友を戀ひ友を得るも

按劍交道の  
長く全うし  
難きげに悲  
しむべき哉

ソークラテ  
スの如何に  
友情を費び  
て "good of  
the soul"  
の次に ex-  
ternal pos-  
sion の最  
も價値ある  
ものと見た  
りシヤウイ  
ク倫理史二  
八頁 クロス  
エヒク羅斯  
の友情を費  
びし歴史

の少きは如何にぞや。世は澆漓儂薄の流れに漂ひて此る美しき熱情をも失へるか、嗚呼友は人生最高の無價寶也、花の前月の下の假そめに結ひし友垣だにうれしきものなるを、金蘭の友の如何に貴きものなるぞ。——人は子孫に生き又は事業に生くといふ、されど真に生くるは友のみ、真の我は唯友の中にありて生き榮え光輝を放つ。曾てわが友に病を得て瞑せんとするに蒞み、我が志をなすものは君也、我は君によりて生くべし、君それ自愛せよとの一語を遺して逝きしものあり、今は憶ひ出づるだに情を爲すに堪へずといへども、友の眞意義を教へたるもの、實に此一語なりと我れは常に思ふ也。——道の友、理想の友のみ眞友也。——さればミルが善人を外にして、真心より自由を愛するものなし

上に有名な  
る事實也、  
凡ゆる徳中  
尤も friend-  
ship を貴び  
たり

といひし如く、吾人は善人を外にして真心より友を愛するものなしといはむとす。悪人は眞の我、即理想を有せず、随つて眞の友あるとなし、自家心中に神を有するもの、道を有するもの、眞善美の理想を有するものにして、はじめてよく交道の大家を盡くすべし、同じ理想の佛前に跪禮するものにして、同氣同聲相呼應感孚するを得べき也。されば單に嗜好を同うし、職業を同うし、位地階級を同うし、又は利益快樂を同うするのみにては、友道成らず、友道は倫理道德を根柢とす、友を得る豈容易ならんや。友は之れを得るが爲めには準備を要す、美德即ち是れ也。——エピクロスの友道論は利己的——その名教の友——シヂウィックの友誼論——一旦結びたる友垣は永久破毀すべからざるものなり

や、愛情をして尚ほ友情を持続し得べしや。——義務以上自發的本能的美徳。

○ 眞理とは何ぞ、人情を離れ、國家を離れ、社會を離れ、一切の欲望を離れて、尙權威を有する客觀的眞理なるものありや。——冷酷なる概念——ゼームス博士の物の性質は、主觀的なりとの見解——温味ある眞理にあらざれば眞の眞理にあらざ。——根なしぐさの眞理は空——。

○ 道徳上、宗教上眞理は多く heart より得らるもの。○ 眞理とは何ぞやとピラトの冷笑に價ひする眞理たるもの多し。○ 眞理は涙をもて (with-many sigh) 得らるべきもの也。○ されど今日の主觀的、抑情的、獨斷的眞理

は吾人の排する所、勝手都合のよきやうに捏造し上げ得らるるものにあらず。眞理はハートを掘りて得らるべきもの、而も其は斷じて博大なる客觀的根據なかる可らず、若し衷情よりだにいつる眞理ならば、一時の痴情も泣言も皆眞理ならざる可らず、眞理は畢竟實在と觸れざる可らず、此一證權を得て、主觀の絶叫始めて百代の人を動かすの眞理となる。○カーライルは眞理の頭髮をつかめり。○ジョンモレーのミルの讚美。

われ曾て水鏡に我が顔をうつし見て、我が神性の發射に不覺歸依の頭を低れしとありき。古聖人はいひき、神の眞の默示は人也と、我れは更に思ふ神の眞の默示は人の心、自

我其者なりと。山阿水涯を遍く搜り求めて神を見いださざりしもの、翻りて自家心上に神の法音を聽取するためし世には多きにあらずや。正にこれ盡日春を搜りて得ざりしも、還りて枝頭十分の春色に驚くもの、嗚呼萬有諸法、何物か太源の不測の意味を語らざる、而も其の最も驚くべき默示は實に自家也、自家の心識也、神を慕ひ求めて半夜枕頭に涙を濺ぐ悲哀の心情也。此の耿々不滅の意識は何物ぞ、いづこより來れる、我れは實に自ら神に叫びて而して常に其の叫び聲の偉大に驚く也。この悲哀の要求の深さを味ひ得るものは、最早生死巖頭に迷ふの人にあらず、悲哀の人以上の新消息に觸れたるもの也、我が心の要求の叫びそのもの、宇宙最深の根底と聯なれるを感ぜざるものは不幸なる

哉。神に叫ぶ至情の聲そのもの、神の最大の默示にあらずして何ぞ、神の眞の默示なるもの、これを措きてまた有らず、基督こゝに神を見、マホメットこゝに神を見、其他の宗教的偉人亦皆然らざるなし。神は汝の衷にあり、汝の衷の心の井底を掘ると眞摯に深刻なれ、而してそこより滾々として湧き出づる要求の清き波に、神の玲瓏無翳の影は宿らむ、心の清きものは幸也、其人は神を見るとを得べければ也。

ソークラテスと耶穌の最期の光景ほど、世に崇高にして人を打つものはあらず。其の心性の高調はひとしけれど、耶穌のは宗教的倫理的、一は神的一は人的。

きのふの嵐に今朝の庭の片隅の花瓶は土にまみれ、垣根の雁來紅の細く立てる二本三本、寒さうにひしと打寄りて頭低れたる、其底には落葉の露の冷たさ中に、蟲の音さやかなるをそとのぞけば、はたと黙するも可笑し。兎も角も、世は早くもとりあつめたる秋とはなりて、移り變る我世のいつまでも高調の詩なく、熱なく、落寞と淋しきかな。——半夜の月華蟲聲——太陽の秋官的正義的、俯々理性の季——秋の野のなつかしき慈母の愛——。

嗚呼何ぞ今の世の shame and quackery の外に眞の友道なきの甚しきや、何ぞ眞情を披瀝し盡くして、靈と靈と相照らし相結ぶ一義の情味なきの甚しきや。

友誼論  
心友  
bosom  
friend

Our echoes roll from soul to soul and glow forever and forever.

是の如く靈と靈と相照らし相反響する如き真情の友垣を結ばんとするには、僞我を棄て、眞我を我佛尊としてかして、高上勇往の精神なかるべからず、人苟も僞我に歡笑して地の甘言諛辭に耳傾けるに急しからむか、此くの如き人は友を有する能はず、眞自我を有せざるものには友なし、小人は友を有せず、そは自我を有せざれば也、アリストテレスの言我を欺かずといふべし。されば友を有するものは所詮自己を有するもの也、麋鹿の溪水を慕ふ如く友を慕ひ求むるものは理想の我を慕ひ求むるものといふべし、友即ち自己開眼の大導師にあらずや。吾人は友によりて自己の眞意義を自覺するを得、友を得るものは己れを得るも

の也、即ち知る、友道交誼其者は吾人が性を完うし圓現の一路に進ましむるものたるを。友を以て自己便益の資となすエピクロス一派の功利觀は吾人の一排する所なれども、もし友道にテレオロヂーありとせば、吾人は之れを以て人の神に進むが爲めなりといはむ、友道の意義大なる哉、高い哉。此道今人棄て、土の如し、かの友垣の道に美しかりし古希臘人の流風遺韻こそ忍ばるゝならずや。

知音の友といふ語あり、我れを生むものは父母、我を知るものは鮑叔なりとは、管仲の語也、げに士は己れを知るもの爲めに死す、己れを知るもの、即ち友を措いて外になし。されど吾人は人に知らるゝを求むる前にまづ知らるべきもの、知らるゝに價值ある或物を有するを力めざるべから

○展懷錄

ず世には己れに知らるゝ値あるものを有せずして、漫に他の己れを知らざるを責むるもの多し、これ眞の友道を得る道にあらず。

(九月三十日)

○幸福説は倫理の小乗教、本性圓現説は大乗教也、而して唯一乗教也。○快樂、幸福、祝福。

○祈禱論。

因果の相關を生命とする知は、因果を辿りつくし差別の相關を撥無し盡くして言説思議を絶するの境に臻れば、こゝに純絶對の實相堂々として吾人の意識に迫り來る。差別を抽し盡くして知の終る所、輒ち實相鏗として情に響き

神とは何ぞや、自家が神、至誠一氣、凝至、人につ迫る實、在人にこれ出、自在に祈り、歸して自ら神也、歸依の即ち神也。

來る、故にスペンサーは曰く、吾人は不可知の實在を感ずと。實相の萬千差別の色相を織れる所は知之れを捕ふ、されど知はつひに差別以上を知るの器にあらず、差別の隠るゝ所即ち言説の絶する所知の滅する所、其の差別の色相以上、不可知の實相の存在其事をだに知の摸索し得る所にあらず。ましてや其の何の色を着け何の音を發するものたるをや。知の極まる所は即ち情の發する所也、物の差別相、whitenessの知に押しつくさるゝや、物の平等相、flatnessは即ち情に觸れ來る、吾人が神在りと知り絶對在りと知るは、其の實知の沙汰にあらずして情の曉得也。絶對に關する一境即ち實に情の本地にして、知は須らく情の直識に聽かざるべからず、知之光は皓々として差別の萬象を照らせども、實相其

者の本地の風光は情之月もて縹渺の中に描き出ださる也。それたゞ月也、知日の照徹は望むべからざれども、それの朧ろのなりや梅柳の幽趣微韻はこゝに求むべきのみ。それ絶對の鐘を撞て洪纖さまざまの音色を聴くもの、唯情のみ、之れを叩く機根の高下大小につれて其の鐘聲無限なるべく、或は神となり或は鬼となり或はハカルとなりミトラとなり或はアルラーとなる。

唐賢三昧集

○ 禪味論——人物の禪味——耶穌、ソークラテース、孔子の禪味。文章の禪味——八方睨み——自我のフリーイング解放——セルファバンドンメント——消極禪と積極禪。

○ 秋は感應の季也。人は天地と感應せよ、友は友と、戀人は戀人と感應せよ、僞エゴの虚飾すたれて、靈と靈と、面と面と相交るの時也。正にこれ

Our echoes roll from soul to soul and glow forever and forever.

の好季節にあらずや。秋は脱我の季也、而して脱我の季は即ち感應の季也。○ 秋は天地があらゆる衣裳の形式を脱ぎすて、直ちに如々たる觀念を露呈し來れるの概あり、空には瀟氣流れ、日は皜々として白く、月は清冷に星は是れ天地の靈魂の窓と瞬くにあらずや。○ 萬象は空靈一氣の貫く所となつて感情煩惱の模糊を着けず。○ 梢を高く離るる秋の空を仰ぐものは、先づ一塵の思念を着けざる達人の悟道の姿を思ふべし。○ 秋は心をうつす鏡たるものたゞ

月のみならんや。秋の萬象は一個の大淨玻璃也。○秋の姿は哲人也、道士也。○春は快樂也、夏は幸福也、秋は祝福也。春は感覺的、美的意義を以て勝り、夏は活動的、倫理的意義をもて勝り、秋は精神的、宗教的意義をもて勝る。○白雲と紅葉と白蘋と紅蓼と、あはれ秋の道士の衣服の瀟洒超脱なる哉。萬木は其の葉を揮ひ落して蒼勁の枝直ちに天と語り、秋江澄徹虚を涵して一塵を浮べず。○秋は融會神交の時也、空を仰げば星華直ちに捫すべくして心は敬虔の波に漂ひ、水に臨めば空明の中鬚眉を鑑して遁影なし。萬化一念と無礙の境に相即して染着固執の跡をとゞめざるは、實に秋を最となす。秋は汎神的也、一味透徹して星の中に我あり、我の中に月あり、一切の芥蒂心界と法界とを去つて、天地

と我と面のあたりに相呼應し相呼吸し相感孚するの趣あり。○高く明かに杉を離るゝ空、深く白く砂を浮ぶる河。○彌望一白の尾花の波、江湖澹蕩の水雲の郷、すべて空明一氣の中にあり。○春霞の帕、夏木の被を脱ぎすて、ふしくれだちし樹身、偃蹇たる雲根を赤裸々に露呈して人に迫るもの、秋の力にあらずや、人は秋に立つて直ちに事實と面する也。嚴肅なる實在は寸前に横れり、人之れを蔽ふ能はず、詐る能はず、曲ぐる能はず、避回する能はず、秋の偉大は實にこゝにあり。實在は秋を通して人心に輝入る、*the light of the sun*。日する、恰も曠野の兒モハメッドが一物遮るものなく上に日月廻轉し、下に大地寂として横はる間に介立して、端的に實在と觸れたる如き様、吾人之れを秋に經驗す。嗚呼誰れか肅



然として秋の威力に感ぜざるものぞ。○秋はその満天の星に洞觀の眼を開くと共に又我等に洞觀の眼を與ふる也。the seeing eye. ○秋の哲人大虚の意識にもし一點妄念の曇を帯ぶるものありとせば遙かなる地平線の雲霞冥色に流れ入るを見るのみ、而もそは春容大雅の意識につつまれて何等の累をなさず。

○

○習慣論

○苦痛と解脱

○學究とは何ぞや

學究の意義と價值と趣味を解するものは學究也。シ  
ルレルのカント知識論研究。○ゲーテのスピノザ

研究

○秋意

○真理——テトヌの所謂鳩小屋は造られたり……思想の缺乏——文章を愛せざるにあらず、思想を愛するの多き也。

○情の權威等

武士道と本能満足。保守と破壊。希臘時代。其の間。の道。ミユアヘッド氏の言。人格の思想。

○倫理學の性質

快樂、幸福、祝福。

動機論

○正月以後

雜記(其四)

然として秋の威力に感ぜざるものぞ。○秋はその満天の星に洞觀の眼を開くと共に又我等に洞觀の眼を與ふる也。the seeing eye. ○秋の哲人大虚の意識にもし一點妄念の曇を帯ぶるものありとせば遙かなる地平線の雲霧冥色に流れ入るを見るのみ而もそは春容大雅の意識につゝまれて何等の累をなさず。

○

○習慣論

○苦痛と解脱

○學究とは何ぞや

學究の意義と價值と趣味とを解するものは學究也。シ  
ルレルのカント知識論研究。○ゲーテのスピノザ

研究

○秋意

○眞理——テトヌの所謂鳩小屋は造られたり……思想の缺乏——文章を愛せざるにあらず思想を愛するの多き也。

○情の權威等

武士道と本能満足。保守と破壊。希臘時代。其の間  
の道。ミューアヘッド氏の言。人格の思想。

○倫理學の性質

快樂、幸福、祝福

動機論

○正月以後

雜記(其四)

我觀錄

汎神論の位地

交道論

ン氏と耶穌との終焉觀

克服主義

○知る人と味ふ人

○美術、文學を味ふの人

眞理を味ふの人

道德を味ふの人

愛は知を全うす

倫理の學說と徳教——徳教は全人の反射あり、香韻あ

り。——南洲の遺訓——南洲ならては言ひがたき躰達

の語あり。——味の語、自得の語、美的の語、徳の流露——

術

○ 自戒録數則

一念起れば直ちに全力を集めて其を裁し去つてまば  
らくも心頭の雲たらしむる勿れ。路ゆく折にも食する間  
にも、關心の問題往々にして起るもの也、かゝる場合には  
其の問題の難解のものたる時は、直ちに抛ちて他日の研究  
思索にゆづるべく、又其が容易に解釋し得らるゝ問題なる  
時は、歩を停め食を息め氣を凝らし思を集めて、而も之れに  
執着し焦燥するとなく、精思一氣にして解釋し去り、而して

雜記(其四)

前の事に復すべし。かくしていつも心王の主宰の下に玲瓏無礙の心狀を存養し、南洲の所謂平生氣象を以て克ち居るやう心がくべし、かゝる工夫積みくゝて懈怠なければ、從容道を樂しみて惑はざる聖人の境に達すると、決して難きにあらず。

(十月十三日)

○ 此日秋晴の散歩例になく心地よく、うれしさの餘り感謝の念油然而として湧きたり。

(全日)

○ ぞと野中の一つ家をのぞけば、薄ぐらき奥の一間のわびしげなる佛壇に小さき白木の位牌立ち、冷煙一炷細う立ち迷へり、この家一つに取りあつめたる秋の暮かな。

○ 秋日雜興。○柿の實。○松茸狩の曾遊憶起。○無常を感じて寺に入るといへる友人の言。○半夜一庭の明月。

○ 如何にして神を見るべき、唯自己の心情の深處に見るべし。神のやうな noble なる人格にあらざれば眞の神は知りがたし、萬人に對する愛情を意識して神の愛を知り……眞善美を慕ふの心に神を見、一切の我心の活動の底に髣髴として動ける神を見る、神を見ずんば我等の心の無限の渴は醫せられざる也、何物を見るも神を見ずんば Superficial phenomenal にして all good all beauty 其者を渴仰する至情の要求を満足せしめざる也。要求は實在が自家を映し見



元的、他は觀美的、一元的。一は猶太的、他は希臘的也。(西洋倫理史一四九より一五〇頁。)

○

希臘人の知識に渴したるは、單に今人がそれを好奇の一念より追求すると異なりて、それを善生活其者と見たるが故也、至善理想其者と觀じたるが故也。希臘人は知識を其自身目的として觀美的に之れを冥想歎美したり、而も今人の如く單に *as such* の知識の零碎斷片の探求に一生を費すものとは異なる。今人は知識のテレオロデーを眼中より逸したり、其の理想生活との關係を逸したり、其の自家目的と結び合はすとを忘れたり、唯々孤立抽象の知識の實驗室に閉籠りて大世界との聯絡を斷つて、屹々として機械の如く何

等の光彩趣味もなき斷片の一部分的研究に役々す、故に其の知識を究むるは職業的也、職業として研究する也。希臘人は知識を至善生活と見たるが故に一面美的渴仰心をもて之れに惚れたるなり、此の熱情ありてはじめて知識は光彩あり、意味ある血肉となりて人生の中心と觸着す。近世人の知識を見る淺近也、功利的也、實利實用の手段方便と見る也。

今の哲學者はシロ氏の所謂教授哲學也。彼等は哲學の爲めに、生きるにあらずして、哲學によりて生きる也。彼等は古希臘人の如く、知識を我理想の中に編み入れ、知識中に自家生命を見出だし、至善を體達し、全人を之れに打ち込むの熱情なく、趣味なし。

藝に遊ぶといふこと決して戯れにあらず、道樂にあらず、道を樂しむ也、涵泳也、名教の中に樂地を見出だす也、かくして知識は人を離れたるものとならずして、人品の溫粹品藻を涵養し、而して沈痛に人生と結び來る、これ眞の意にての功利也。

○

我等の意識の經驗には、self asserting side と self regretting side とあり、self righteous の念つよきと共に、自己の小弱短處多き言ふにも足らぬ僕なるとを感じて、恰も長夜の夢の驚き覺めたるが如く、慄然として自ら自らを責め、神の前に謙抑なるべきを悟るとある也。一は希臘魂にして他は猶太魂也(パウエルセン参照)。

滿假自大の徒は却つて自ら小にして智者何くも自ら大なるもの

希臘魂と基督教的の予は此の中についで感をついて大なるものを求め、我々の所は極め

現代の思潮に觸れたるものは、意識的と無意識的とに論なく、何人もこの實驗を有するならん、我等また實にこの思潮の眞中に漂ひ、今や自覺をもて之れを裁し、之れを批評し、而して之れが聰明なる統一的原理を渴仰しつゝある也。self を assert するの必要は、時には人を驅りて ego-mania とならしめ、或意味にて Ubelmenseli 的意力を發揮して無限に自我を擴大せんとするの要求となり、又或時は一向胸を打つて我が罪業に泣き、缺陷に泣き、抑遜自卑して神の前に under-servant なるを意識し、Nothingness を歎せんとする立、我の九天に揚りしと思ふ次の瞬間は、否、我の九地に下る、この經驗は病的なるべし。されどこれ實に現代の思潮が與ふる二個の要素也、一は希臘魂、東洋魂にして他は基督教魂也。

此二魂をうまく調攝するは(折衷にあらず)道德的、宗教的天才の力にまつの外なしといへども兎も角も此の二方面の錯綜して我が思潮界に旺流しつゝある事實は、苟も將來の宗教倫理の新理想を説かんとするものゝ見逃すべからざるもの也。單に我の中に神の内在を説きて我即神と説くはむしろ前者の思潮にして、今の新宗教を説くものゝ見到底人心の要求に應ずる能はず、一面自我を超越する基督教的神の必要あり。パンシースチック神と一神的神とこの二面の要求は没すべからず、將來の宗教を説くものはこの要求の中に最も重要な鍵<sup>キ</sup>を發見すべき也。(建部博士の社會學、宗教の條參照)

此二面を立派に調和し得たる人は既に現代の思潮問

題の一面を解釋し得たる人にして、一步を時潮の先頭に抜けるもの、我等は未だかゝる先覺の位地にあらず、むしろ其の思潮の渦中に苦しみつゝあるもの、而してこの苦痛の實驗を提出して、同感者と共に調和のキイを探求せんとするもの、幾くは我等の實驗をして……。

○

神をエゴイの中にのみ見る井上博士流の宗教は、何等の渴仰なき、何等の欣求なき、何等の他界超越の境を慕ふ幽玄神秘の感なき也、一種の倫理上の要求のみ。何故に他界未見界を慕ふが誤れるか……神は到底無限超越の一面を有す、彼等は神を讚美せんとして我を讚美す、我即神の意識は誇大自矜の意識也。吾人は我の中に實現せる神を美



的に打ち見て、我れの神性に自ら強うし、自ら立する自覺を有すると共に未現の神にあくがれて、其の二元的ガッブを埋めんとして倫理的に煩悶し奮闘しゆかんとす。我は神なり、何等の不敬語ぞ。基督は未だ一度もかゝる自大の語を吐きしとあらず、此の如きは神を己れの中に幽して、毫も宗教的衝動を發動せしめざるもの也。

罪の黒さ blackness は實に超自然的深奥を有す、誰れかよく其の深さを測りつくし得るものぞ。我れ罪を犯しぬといふ意識、世にこれほど心情の中心に苦痛の棘を刺すものあるべしや。悔悟によりて之れを償ふを得べしといふか、然り悔悟はよく罪の意識を和ぐるを得べし、されど悔悟は全く罪の汚點を拭ひ得べしや、否、我が實在の眞に黠じたる

將來の宗教の一方面、  
現今の倫理問題の  
宗教問題の  
腹稿中より  
一節を取り  
てここに載  
す。  
ヨブ一五の  
一五

一黒子の罪は永劫抹すべからざる汚點を印したる也、實在の一部を削り去りたる也。「わが愆はすべて藁の中に封じてあり、汝わが罪を縫ひこめたまふ」(ヨブ)、一念こゝに至りて誰れか中夜無限の闇黒に慄然として夢驚き涙潜々たらざるものぞ。吾人はバンヤンに同情せざるを得ざる也、自由意志のコーパレーターたる人及神に自由意志の濫用を謝せざるを得ざる也。我意志は神のを分有せるもの故に神に濟まぬの念起る也。吾が罪の意識、意志の深さ、罪業の深さは吾が存在の根柢中心に沈みて、そこに一種の和解を求むるにあらざれば……必ずしも天外の力を借りて其の救助を得んとするにあらず、されど唯だ記せよ、我等が犯せる罪は實に全實在を根柢よりして震撼するの力あり、諸天

の光榮に暗黒無限の雲を掩ふほどの大事實なるを、そは……一種の宇宙的解脱によらざれば、透徹の平和を得ざる重大の事件なるを記せよ。倫理は未だ以て罪の深奥の意識を解くに足らず、此の一事實に對して世の道德學者の説く所は、カーライルの所謂「唯だく表面を嘵々するのみ」〔“Babbling on the surface.”〕

この二面の意識は、如何ほどまで外來的であるか、はた自發的であるか、其の起原由來は踪跡しがたいが、兎も角も今は予の思想の *vital part* を織りなしてゐる血肉の糸である。

罪の意識には常人の思ふより深き破綻あり、一片の悔悟のみによりて安んずる能はざる、どことなく「濟まぬ」

の聲あり。我等はこの意識の中に天地の實在者を認め、之れと一種の和解を求むべきを知る。——一片の悔悟よく罪を拭うて餘ありと思ふは、未だソールの深き事實を意識せざるもの也。

「一點ブライドの氣あらば我に利あらず」といふエマールソンの言の如き、ブルードンシャル、グラウンドよりしてにあらざり、利不利の打算は外にして、中心實に我を謙するの要求ある也。

○  
希臘人の知識は自我の一斷片と僅かなる關係を有つが如きものにあらずして、其は全自我とアイデンチスアイサレ、全自我に満足を與ふる底の意味極めて豊富なる知識也、

パウルセン、  
アリストテ  
レスの條  
參照

「學問は人  
の身の光の  
如く人の心  
の如く人の  
如く世の營  
みへの心か  
そへもたら  
んおこゆか  
ておくゆか

理想としての知識也、至善としての知識也、其自身に充足し  
て他に須つなき完了の知識也、故に其は随つて美的に打ち  
眺めらるゝ也。希臘人の知識は至善其者なるが故に、而し  
て其れ自身一個完了の目的をなして他に須つ事なきが故  
に、彼等はまた之れを殆んど觀美の對象として之れに渴仰  
の誠をさゝげたる也。彼等の知識的生活が一種美的趣味  
を有するは、畢竟知識的生活が彼等に取りては至善の生活  
なるが故也、彼等は知識を殆んど實在と同視せる也、物を知  
るは其物に到ると信じたる也、至善の知識はやがて至善其  
者となりたると信じたる也、神を知るはやがて神に達した  
り、と信じたる也。知識の一義、此くの如く見來りて始めて  
乾枯ならず、淺薄ならず、近代人の職業的、機械的知識と何等

しくなむあ  
るべき  
(本居大平  
古學要)

の差異ぞや。畫家が一抹の丹青に全精魂をそゝぎ入るる  
如く、樂人が一管の笛に全心血を吹き込むが如く、彼等希臘  
人も亦知識其者に全人の理想を見出したる也、美術家が高  
き意味にて藝に遊ぶが如く、彼等も亦高き意味にて知識に  
遊びし也、物に遊ぶものにして、はじめて其者の人生に對す  
るテレオロヂカル、センスを知り得る也。

○

菊數首

賜の黃菊うれしき情けかな

白菊のうつり香もある黃菊哉

菊もらうて菊に禮いふ男哉

思ふ事もなくて菊見る病かな

雜記(其四)

我觀錄

われ病んでけふ命あり菊の花  
病室の一日を菊の馨り哉  
病床のけふの掃除や菊のはな

冬季雜吟

木枯の里遠くして冬籠  
木枯のなぐり力や辻佛  
繪姿のなき友一人冬ごもり  
地藏様の片袖いとゞまぐれけり  
神思ふ一夜木枯の獅子吼哉

(十二月十二日夜)

歳晚書懷

來む春の惜み姿や梅一枝

雜記(其四)

三三

我觀錄

雜記其四畢

Handwritten text at the top of the page:

雜記其四畢

Large central characters: 雜記

Vertical text on the left side:

我觀錄

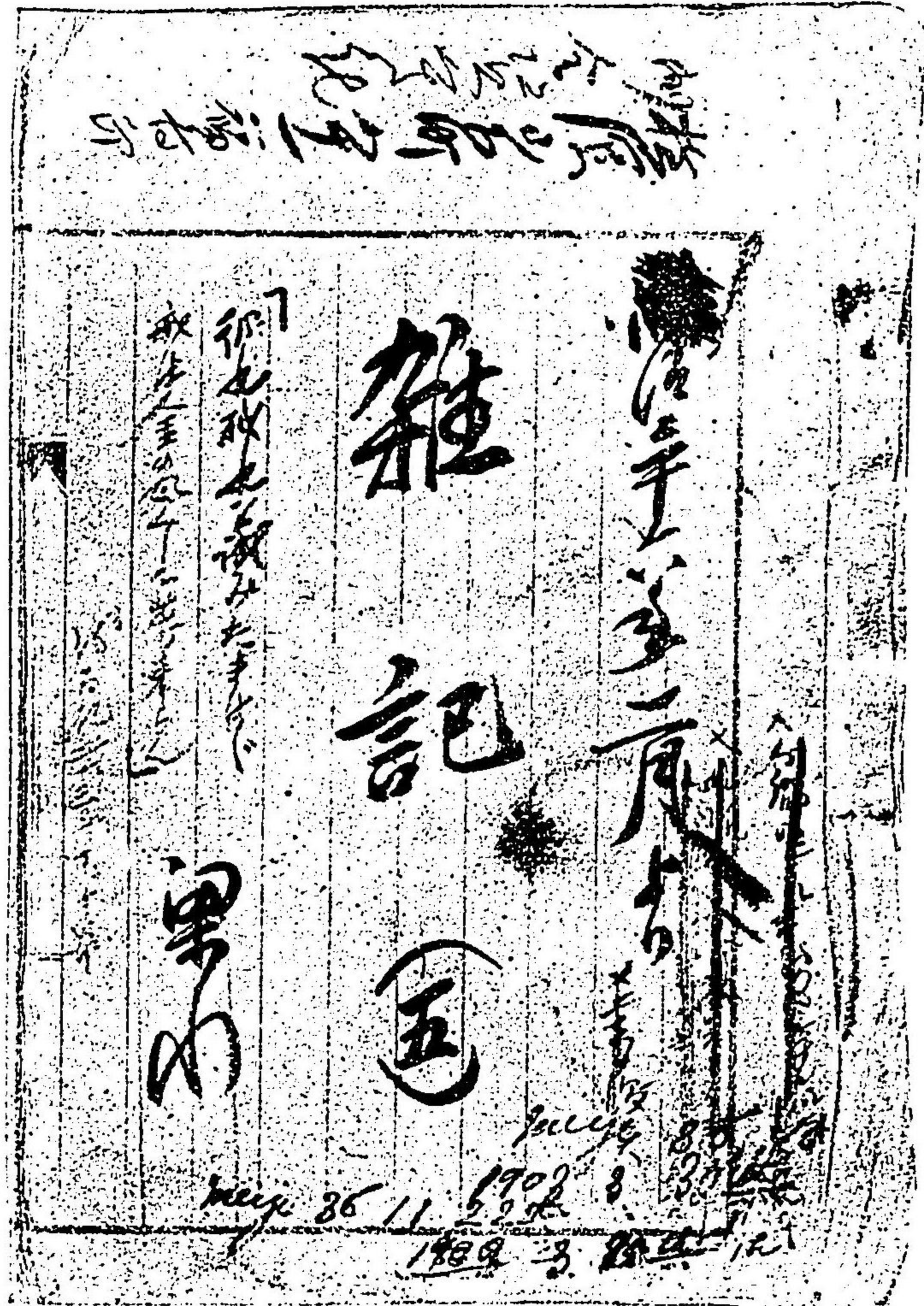
Vertical text on the right side:

雜記其四畢

Bottom section containing numbers and dates:

1902 8 30

1909 8 20



雜記其四畢

我觀錄

110

## 雜記 其五

動機に關する法律上の見解と倫理人格と文章

○ 自己實現主義は自己充實主義とも解すべし。所謂槌の一揮一下にも自家人格を發揮して全力を餘さざる事也、如何なる事、如何なる方面にも *soil* を遍在せしむる也、我といふものに *gap* なからしむる也、*fissure* なからしむる也、*Emerson* の所謂 *presence of soul* 也、かくの如くして眞個の満足あり、剛毅あり、從容道に躰して不惑不恐の境にあるを得べし。いつも心中一團の氣の充實遍在するを感じて所謂法の王たるを得べし。太虚と一躰、神と同躰などいふ

境、是れ以外にあるべからず、故に自我の充實は自我實現の  
 「最上方法」といふべし、一言すれば靈魂をして其の固有の遍  
 在性、充實性を全うせしむる、これやがて自我實現の最良手  
 段也。靈魂は空虚を忌む、充實ならんとし實在せんとする  
 が靈魂の本性也、我等この實在性を厚うし饒かにするほど、  
 神生活に近づく也、偉大となる也。この充實遍在の傾向に  
 逆行せんか、是に空虚の感生じ、心中無限の寂寞生じ、所謂良  
 心の苦痛を感ずべし。善とは靈魂の充實をいひ、惡とは其  
 の充實を妨げ否むと也、一は積極的にして他は消極的、一は  
 肯定的、他は否定的、一は有にして他は無也。

スピノザの永劫實相觀也

□生の所  
 □靈の誠  
 □識の意  
 □發の煥  
 □滿の充  
 □心に實  
 □する也

予の宗教觀  
 の(1)

宗教とは一切を燒盡する天火、神火 Celestial fire の中に、

我れも共に炎々として燃え合ひ融け合ふと也。人に、身心  
 共に融け合ひ燃え合ふ一味融會の境ある如く、利己利他の  
 感情の區別没して唯一團感情の火の柱となつて炎々燃え  
 合ふ境のある如く、天地萬有、人間草木、一切を打つて一團と  
 して融け合ふ高調無限の境あり、これを宗教的高潮となす。  
 家族と共に燃え合ふ、其の一段也、國家と共に燃え合ふ、其次  
 也、人道と共に燃え合ふ、其次也、更に一切萬有と共に燃え合  
 ふが即ち最高の宗教也、プロテスマス、禪など之を暗示す。  
 人はこの高調に達して其道德事業に一味の氣韻あり、神彩  
 あり、潤澤あり、詩歌ありといふべし、神と共に燃えて其の靈  
 光の中に立つ、日常役々の事皆其一徳の神聖を分有して莊  
 嚴淨土を現じ來る、反照の野の農夫、茅屋を照らして神聖化



するが如し。單なる道德單なる事業はどことなく枯淡也、  
リヂッド也、苛細也、嚴酷也、融會一源に朝する歸趨の見えて、  
始めて其は一切に其の存在の意味を有せしむ。(三月二日)

○ 人格と文章——叔子八家批評。 Style is man ——エマー

ソンの語——仁義の人其言嚮如也——論語の品位——拙  
堂文話——雪舟、雪村——一字一句に人格を吹き込むべし。

——個性の發揮——拙堂の語の如く取其性所近一二書專  
心治之。——古人に及ばずと思ふは、畢竟古人のやうな文を  
書かんと思ふが故也、摸倣心あれば也。——古文は参照の爲  
めに讀むべし、文氣を養ふ一助として讀むべし。——心裁を  
出だす工夫肝要也。——東坡作文尙意、不甚取揚雄之辭——

陳眉公云刻  
齒古人是後  
世第一病  
昌黎云陳言  
去

趣味と人物——ラスキンの名語——文品は人品也、文章の  
テレオロデー——歐蘇二家の文品(砂の跡)。

予の宗教觀  
の(一)

宗教的眞理は根本的に矛盾相を有す、其が符號的表現を  
最要條件とする一事是れ也。一言すれば宗教は符號也、符  
號を離れて宗教的眞理なるものを考ふる能はず、宗教は活  
如たる具象的眞理たるが故也。神は冷かなる抽象的眞理  
として會得せらるゝ能はず、富贍充實の最高調の詩的表彰  
を藉る能はざれば其のかすかなる面影だに偲ぶ能はず、而  
も符號は到底符號なるが故に、神の無限生命を盛るに堪へ  
たるものあるなし、所詮無限を有限の符號に盛らんとする  
所に宗教的眞理の矛盾ある也、而もこの矛盾的方法たる符

此點に於て  
はアラト  
ンの見誤れ  
りのむしる  
プロテノ  
スの見當れ  
り西洋倫  
理史一六  
一参照

故に同じ天  
父の符號の  
意義も宗教  
的意識の高

號を藉るにあらざれば、吾等は神に接する能はざる約束を有するを如何せん。この意義を躰するものにして始めてよく「天之父」と呼びし基督、及び一般基督教徒の宗教的意識の、かの冷かなる科學者の一排する如き迷信にあらざるを知るべし。——されど宗教は符號なるが故に、随つて如何なる宗教にも迷信の影を着けざるものなしといふも可也、唯其の多少の差のみ。我等は迷信の暈を帯びたる媒、medium を經るにあらざれば神の光明に接するの道なき運命を有する也。葉頭の露に輝く月を見て天上の眞如の月を偲ぶの外、道なき運命を有する也。如是は我等人類の有限性より來る必然の約束也。(一切の知識なるものも亦、要するに一種のシムボルにして、如實の客觀的眞理にあらざるにあら

下につれて  
貧富無限の  
差を生ずべ  
し。高き意  
識の人は一  
切の符號は  
神の呼ぶに  
は餘りにあ  
らざるをア  
ラズとあ  
らざるべし  
天父と呼ぶ  
とき何人も  
(理性の要  
求を否まざ  
る人は)全  
く我等が意  
味する父と  
して意識す  
るものなる  
べし。此か  
る無限の愛  
あり情あり  
□の中に神  
の無限の消  
息の息の  
ばんとすれ  
ば人の故に  
或人は父と

ざるか)——是故に宗教家を分つて二種とするを得べし、一は符號其儘を眞の神と信じて之れに歸依三昧するもの、一は符號の符號たるを知りて、唯そを已むを得ざる條件手段として、據りて以て大靈の神祕の消息に興らんとするもの。——而も符號と知りながらも、感情の高調する場合には其符號たるを忘れて、其符號の表はす其儘の對象を實在者として渴仰合一するが宗教的感情の特質也。これ實に已むを得ざる也、須らく感情をして行くべき所まで行かしめよ、これ何を病まんや、此くしてのみ吾人は多少不純(知識上より見て)の病的心狀の中に、他の抽象的思索家の想像する能はざる一種無類の深奥なる靈の實驗を得る也(ルナンの耶穌の病的な心狀を辯護せる條參照、及病んだバスカルたら

いはずして  
父母といひ  
たしといへ

んを欲すの語、吾人は多少の伴弊を忍びても、尙此無價の寶珠を得んとする也。此る手段に於いて *by any way* 或感應の實驗を得、否むべからざる意識の實證なるものを得る也。理性の理解以上の或消息也、これ神祕なれども實在也、——友は我れを譏れども、我は尙神に向つて涙をそそぐ、已むに已まれぬ要求の一義、深いかな其の意義。——眞に要求の *key note* に觸れたるものは神をつかめるもの也。——ヨブの如き其の一例也、ヨブが後に神を見たる所以を言はざるは、言ふすべなかりしが故也、身讀實證は表現の道なければ也。——泣くものは幸也、神を見るとを得べし。——知識の要求なるものも、知識よりは、ずつと深いものゝ要求があつて操つてゐる也。

知識と功利

○  
今の人が知識を蓄ふるは、全く淺薄なる功利の爲め也、支那風の科擧の爲也、試験に應ぜんが爲也、生活の資を得んが爲也、一會社一銀行員たらんが爲也、人格其者の潤澤を増し、其の實在を増さんが爲めに、する純乎たる高尚の興味よりするものなし、何ぞ切々として功利に急ぐや、——……パウ  
ルゼンは希臘人の知識的生活を重んぜし尙二つの理由を、  
擧げて、(一)知識の不可抗力を信ぜしと、(二)彼等の *practical life* は即ち *political life* にして、而して政治的生活は黨派軋轢の爲に正直の人の與るに堪へざる者となりし故、即ち  
プラトンの “who, in the storm of dust and sleet which the driving wind hurries along, retiring under the shelter of a wall.” の例に倣うて公

共的生活を退き、哲學の中に唯一の隱家を覓めたりとせり。

予の宗教觀  
の(一) 勿論予の目  
下。宗教觀  
也。靈魂は  
不斷に其  
領分を擴  
ゆきて實  
性を増し  
くものなり  
と信するが  
故に。宗教  
他日の宗教  
觀は或は變  
るべし。

○ 縱令鰭の頭にて、眞に之れを信仰すれば一種の神の感  
應あるべきは疑を須るず、一切信仰の對象は縁りて以て吾  
人が神を表する符號也、神と語る媒介物也。而して神は吾  
人が信仰の機根に應じて竹頭木屑にも宿り給はずといふ  
事なし、而して符號の中最も富贍に具象的なるは人格的符  
號也。神は人格なるか否か不可知なれど、こは吾等が神の  
生命と感應するに最も有効なる符號也、媒介也、何等かの人  
格的符號を媒としてこゝに神人相接す。——符號の形式は  
不絶、理性の批評によりて破壊せられ、批評せられゆくべし、  
されど其符號を通して神人相感應應化する一道生命の流

れは理性の批評もて破壊する能はず、而して宗教の眞髓は、  
この生命の感應にあり。

予の宗教觀  
の(一) 勿論予の目  
下。宗教觀  
也。靈魂は  
不斷に其  
領分を擴  
ゆきて實  
性を増し  
くものなり  
と信するが  
故に。宗教  
他日の宗教  
觀は或は變  
るべし。

○ 鰭の頭の信仰にも尙一種の靈的感應あり、其れに吹き込  
みたる我が祈の生命は、未だ曾て經驗せざる一種の反應と  
して我れの靈魂に反跳し來る、感應とは即ちこの事の義也。  
我が要求より神を祈り出だし、而して之れに向つて一念の  
誠敬を捧ぐれば、そこに否ひべからざる感應の事實ありて、  
我心は新たなる平和、油然たる淨樂を感ずる也。感應の性  
質に於いては友の感應と神の感應と異なる所あらず、唯其  
の對境を異にするの差あるのみ。